

支出の部	科目	金額 (円)	予算額	増減
1.事業費				
1.1.出版費	9,800,000 (9,800,000)		0	
会誌等印刷費	7,800,000 (7,800,000)		0	
編集費	1,200,000 (1,200,000)		0	
発送費	800,000 (800,000)		0	
1.2.行事費	500,000 (500,000)		0	
1.3.学会賞経費	50,000 (50,000)		0	
1.4.委員会活動費	150,000 (150,000)		0	
1.5.名簿積立金	300,000 (0)	300,000		
1.6.名簿作成費	0 (600,000)	△600,000		
1.7.事務委託費	1,600,000 (1,600,000)		0	
1.8.会員業務郵税	200,000 (200,000)		0	
小計	12,600,000 (12,900,000)	△300,000		
2.管理費				
2.1.庶務費	200,000 (200,000)			
2.2.会議費	200,000 (300,000)	△100,000		
2.3.通信費	30,000 (30,000)			
2.4.旅費	600,000 (600,000)			
2.5.選挙費	0 (80,000)	△80,000		
2.6.雑費	80,000 (80,000)			
2.7.会誌保管料	171,600 (171,600)			
小計	1,281,600 (1,461,600)	△180,000		
3. 予備費	500,000 (500,000)			
4. 基本財産充当引当金	500,000 (500,000)			
5. 次年度繰越金	9,238,400 (7,958,400)	1,280,000		
計	24,120,000 (23,320,000)	800,000		

編集者 鈴木 款 〒305 茨城県つくば市長峰1-1 気象研究所地球化学研究部 電話 0298(51)7111
発行所 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内 電話 東京 03 (817) 5801

日本地球化学会ニュース

No. 120

1990. II. 28

1990年度日本地球化学会春季シンポジウム

主催 日本地球化学会

日時 1990年4月7日(土) 9:00~17:45

会場 東京工業大学・大岡山キャンパス

本年度は地球惑星科学関連学会合同大会の会期中に開催されます。

コンビーナー 清水 洋・小倉紀雄

プログラム

一般講演 (9:00~11:10)

C21-01 (9:00~11:10)

水田土壌に含まれる化学成分の垂直分布

上野広行・鶴見 実・一國雅巳(東工大総合理工)

C21-02 (9:15~9:30)

東京湾堆積物(湾奥~外湾)における陸起源有機化合物の分布

高田秀重・小倉紀雄(東農工大農), 石渡良志(都立大), 才野敏郎(東大海洋研)

C21-03 (9:30~9:45)

グリーンランド氷床コア(Site J)中の有機成分:

低分子ジカルボン酸その他

河村公隆・安井 治(都立大), 藤井理行(極地研)

C21-04 (9:45~10:00)

大気-水圏におけるヒ素及びセレン化合物の化合形態及び濃度分布

田中 茂(慶応大理工)

C21-05 (10:10~10:25)

噴火湾底層水に見られる高濃度のラジウム

—地下水の影響か

川端一史・原田 晃・角皆静男(北大水産)

C21-06 (10:25~10:40)

北部日本海溝周辺域でのウランの沈着について

成田尚史・斎藤良介・原田 晃・角皆静男(北大水産)

C21-07 (10:40~10:55)

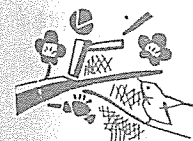
北西太平洋3地点についての海水のREEパターンとCe, Nd同位体比

立川和代・清水 洋・増田彰正(東大理), 野崎義行(東大海洋研)

C21-08 (10:55~11:10)

顕微ラマン分光法によるいくつかの分化した隕石の構造化学

鍵 裕之(東大理), 高橋和也(理研), 清水 洋・増田彰正(東大理)



招待講演Ⅰ（11：20～12：30）

C21-09（11：20～11：55）

海底熱水系の地球化学
石橋純一郎（東大理）

C21-10（11：55～12：30）

コンドリュール前駆物質の化学的特徴
三澤啓司（東大宇宙線研）

招待講演Ⅱ（15：45～17：45）

C22-01（15：45～16：30）

北投石—その地球化学
綿萩邦彦（東大教養）

C22-02（16：45～17：45）

生体反応と地球環境
大島泰郎（東工大理）

前記の講演番号は合同大会での番号です〔C会場, 2日目〕。（13：30～15：30）は合同大会共通の特別講演があります。

なお、合同大会全体のプログラムは後日お知らせいたします。



「日本地球化学会学会賞，奨励賞」受賞候補者推薦の募集

応募期限 3月31日（土）

日本地球化学会授賞規定により，学会賞および奨励賞受賞候補者の推薦を募集いたします。

つきましては，下記ご参照のうえ会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者をご推薦下さるようお願いいたします。

候補者の資格：

- （学会賞） 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。
- （奨励賞） 1955年4月2日以降に生まれた本会正会員（学生会員を含む）で，地球化学の進歩に寄与する秀れた研究をなし，なお将来の発展を期待しうる者。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦書1通に，推薦理由書，説明資料を添付して3月31日（土）までに学会事務所へ（当日消印有効）。

提出先：〒113 東京都文京区弥生2-4-16

日本学会事務センター内

日本地球化学会受賞者選考委員会

☆推薦書は同封の所定用紙もしくはこれを複写したものをご使用下さい。なお，この件についてのお問い合わせは本会庶務担当幹事（下記）まで。

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部地殻化学研究施設 野津憲治

電話（03）812-2111 内線4624

FAX（03）816-1784

年 月 日

日本地球化学会（学会賞，奨励賞）受賞候補推薦書

日本地球化学会受賞規程により，下記の者を日本地球化学会（学会賞，奨励賞）受賞候補者として推薦します。

推薦者

氏名

印

記

研究題目

氏（ふりがな）名

生 年 月 日

現 住 所

勤務先（職名）

最 終 学 歴

略 歴

添 付 書 類

推薦理由書（様式自由：A4判横書きで，2000字程度）

説明資料（論文別刷その他審査の参考となる資料）

公開講演会盛会裡に終了

平成2年2月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、平成元年度に主催の公開講演会を3回開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、その公開講演会の概要に加えて、本会議が実施している国際的活動などについて、お知らせいたします。

日本学術会議主催公開講演会

本会議では、科学の向上発達を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させるという本会議の設置目的に沿うための活動の一環として、毎年、公開講演会を開催している。この講演会は、本会議会員が講師となり、学術的香気が高く、かつ、時宜にかなったテーマを選定して開催している。

今年度も3回の公開講演会を開催したので、その概要を以下に紹介する。

I. 公開講演会「人間は地球とともに生きられるか」

標記講演会は、去る平成元年10月27日（金）13時30分～17時に、本会議講堂で約280人の参加を得て開催された。

最初に、吉野正敏・第4部会員（筑波大学地球科学系教授）が、「地球の温暖化とその影響」と題して、大気中の二酸化炭素とフロン・メタンなどの増加による気温の上昇に伴う、農林水産業をはじめ人間の社会経済にもたらす大きな影響などについて述べた。

続いて、久馬一剛・第6部会員（京都大学農学部教授）が、「地球環境と農業のかかわり」と題して、人口の増加、消費水準の向上などが世界中で農業そのものの変貌を余儀なくしており、その中で土壌侵食や塩類化などによる生産力の退化（砂漠化）や、水質汚濁・土壌汚染などを引き起こしていることを指摘し、農業のあるべき姿について述べた。

最後に、藤井隆・第3部会員（名古屋大学経済学部教授）が、「地球環境の経営と人間社会の発展」と題して、地球環境の経営は、地球環境の科学的研究に加えて、人間社会の運行との相関についての研究が必要であることを指摘し、人間社会の持続的発展を考えていくための視点について述べた。

II. 公開講演会「“人権の歩み”から何を学ぶか—フランス人権宣言200年を記念して—」

標記講演会は、去る平成元年11月18日（土）13時30分～17時に、本会議講堂で約250人の参加を得て開催された。

最初に、弓削達・第1部会員（フェリス女学院大学長）が、「“人権”以前の世界」と題して、人権思想のなかったギリシャ・ローマ時代における人権思想の萌芽とも言えるべきものについて、同時代の一哲学者の奴隷等をめぐる精神的苦悶を例にとって述べた。

次いで、大石嘉一郎・第3部会員（明治学院大学経済学部教授）が、「近代日本の人権思想—自由民権運動の人権論を中心に—」と題して、主として、明治時代の自由民権運動における人権論について、その特徴、特徴の起因となった当時の社会的条件、それが与えた影響などについて述べた。

続いて、杉本大一郎・第4部会員（東京大学教養学部教授）が、「科学技術と人権」と題して、近年の著しい科学技術の発展によってもたらされた、広い意味での「人権と自由」の様々な様相について、それらの事情と問題点などについて述べた。

最後に、南博方・第2部会員（一橋大学法学部教授）が、「人権の進化と創造」と題して、現在までの人権の進化の跡を回顧するとともに、最近における人権立法や人権思想を紹介しながら、今日生成しつつある現代型の新しい人権について述べた。

III. 公開講演会「くらしと学問の近未来—これからのくらしと学問—」

標記講演会は、去る平成元年12月8日（金）13時～17時に、仙台市の勾当台会館で約70人の参加を得て開催された。

この講演会の開催に当たっては、東北大学、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、河北新報社の後援を受けた。

最初に、藤咲暹・第7部会員（東北大学名誉教授）が、「長寿社会の条件—長生きを支える医学と医療—」と題して、健康を阻害する危険や長生きできるための条件を充足するには厳しい現実があることを指摘し、長生きを支える医学と医療にとっての問題点を指摘し、それらの解決策について述べた。

続いて、澤登俊雄・第2部会員（国学院大学法学部教授）が、「犯罪現象への多様な接近」と題して、犯罪抑止や犯罪者の社会復帰などのための施策の推進には犯罪や犯罪者をつくりあげていくプロセスの分析など多様な視点からの検討が不可欠であることなどについて述べた。

最後に、上飯坂賢・第6部会員（東京農業大学農学部教授）が、「森とむらと都市の共生」と題して、健全な森林づくりのために都市の住民と山村の住民が連帯することは、新しい人間尺度の文化の創造につながることを、日本と外国との場合を対比させて述べた。

（なお、これらの講演会の講演要旨は、「日学双書」として、（財）日本学術協力財団から出版されます。）

地球環境問題における工学研究の 在り方について—第5部報告

このたび、本会議の第5部は、標記報告をとりまとめ、本会議運営審議会の承認を得て公表した。

(要 旨)

近年における人間活動の大規模化は、地球環境に急速な変化をもたらし、その変化が人類の生存基盤そのものさえ脅かすようになってきた。そのため、次の世紀に向けて人類が総力を上げて取り組むべき、極めて重要かつ緊急の課題として地球環境問題が広く国際的な関心を集めているのは周知のとおりである。

元来、この問題は、時間的にも空間的にも極めてスケールが大きく、かつ、気圏、水圏、地圏及び生物圏全体にわたる相互干渉の結果として現れるものだけに、対応策を選択するに当たって、従来とは異なった長期的、学術的かつ国際的視野に立ち、持続的に取り組む必要がある。また、局所的な現象に目を奪われた一時的な対応や規制ではなく、地球全体における持続的な発展という観点から、地球を一つのシステムとして捉え、自然環境と人間活動とをいかなる価値観に基づいて調和させていくべきかという視点から、総合的に取り組むべき問題である。

地球環境問題が人間活動の結果として現出したことを考えると、今なすべきことは、地球環境に配慮した健全な人間活動のために新しい工学の基準を導入するなどにより、人間活動と地球環境の調和に役立つ広く新しい学問領域を創出することである。

それは、地球環境と人間活動とを総合して一つのシステムとして捉え、そこにおける物質・エネルギー循環・エネルギー収支のあるべき姿を定量的に評価できる手法を開発し、人類が生存し得る新しい技術体系を構築する学問領域である。このような地球システムの工学を「地球システム工学」と呼ぶことにする。

このような新たな学問領域創出と新たな技術体系確立のためには、既往の学問分野からの協力により速やかに研究体制を構築する必要がある。このためには、当面、研究プロジェクトを設定することにより強力な研究推進を行う必要がある。我が国がかかる学問領域を率先して創出し、国内外の研究者とともに地球環境問題解決に取り組むことは、研究開発力、技術力に対する海外の期待というものを考えた時、我が国の責務と考えられる。

平成2年(1990年)度共同主催国際会議

本会議は、昭和28年以降おおむね4件の学術関係国際会議を関係学術研究団体と共同主催してきたが、平成2年(1990年)度には、2件増えて、次の6国際会議を開催する。

■国際土壌科学会議

開催期間 平成2年8月12日～18日
開催場所 国立京都国際会館(京都市)
参加者数 国外1,000人、国内500人、計1,500人
共催団体 (社)日本土壌肥科学会

■第22回国際応用心理学会議

開催期間 平成2年7月22日～27日
開催場所 国立京都国際会館(京都市)
参加者数 国外450人、国内550人、計1,000人
共催団体 日本心理学会

■第15回国際微生物学会議

開催期間 平成2年9月13日～22日
開催場所 大阪城ホール外(大阪市)
参加者数 国外2,000人、国内3,500人、計5,500人
共催団体 日本微生物学会

■第11回国際数学連合総会及び第21回国際数学会議

開催期間 平成2年8月18日～29日
開催場所 神戸国際会議場(神戸市)外
参加者数 国外1,500人、国内2,000人、計3,500人
共催団体 (社)日本数学会外6学会

■第11回国際神経病理学会議

開催期間 平成2年9月2日～8日
開催場所 国立京都国際会館(京都市)
参加者数 国外600人、国内900人、計1,500人
共催団体 日本神経病理学会

■第5回国際生態学会議

開催期間 平成2年8月23日～30日
開催場所 横浜プリンスホテル(横浜市)
参加者数 国外900人、国内1,000人、計1,900人
共催団体 日本生態学会

二国間学術交流事業

日本学術会議では、二国間学術交流事業として、毎年2つの代表団を外国に派遣し、各訪問国の科学者等と学術上の諸問題について意見交換を行って、相互理解の促進を図る事業を行っている。

平成元年度には、①10月25日から11月4日まで、イタリア及びスイスへ、渡邊格副会長以下5名の会員から成る代表団を、②12月4日から12日まで、インドへ、大石泰彦副会長以下6名の会員から成る代表団をそれぞれ派遣した。

イタリア及びスイス派遣代表団は、イタリアでは、イタリア学術研究会議、大学・科学技術研究省、ローマ大学、ローマ日本文化会館など、スイスでは、スイス学術会議、連邦内務省教育・科学局、スイス科学財団、ベルン大学、チューリッヒ大学などを訪問した。

各訪問先では、関係者との間で、それぞれの国の学術研究体制や科学技術政策などをめぐって意見交換が行われたが、特に、イタリアでは、研究行政の一本化を図るために、大学を文部省の管轄からはずして、大学・科学技術研究省を設置していることについて、また、スイスでは、連邦政府とともに、強い権限を持つ州政府が存在する同国の行政の仕組みと学術行政との関連について、それぞれ熱心に意見の交換がなされた。

インド派遣代表団は、インド国家科学アカデミー、科学産業研究会議、計画委員会、科学技術庁、ネルー大学、デリー大学、タタ基礎研究所などを訪問した。

各訪問先では、関係者との間で、科学技術振興方策及び両国間の今後の積極的な学術交流などをめぐって意見交換が行われ、また、政変の直後ということもあって、選挙の話から、経済力の向上、中産階級の躍進などの政治、経済の問題などについて熱心に意見の交換がなされた。

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。
〒106 東京都港区六本木7-22-34
日本学術会議広報委員会 電話03(403)6291

地球化学の出番です

日本地球化学会会長 綿 祓 邦 彦

最近、地球環境の問題が各方面でとりあげられています。地球環境をまともに議論するには宇宙化学・地球化学の知識が必要です。また、物質の循環に関するより正確なデータが集積されなければいけません。地球化学が太陽系までを含めた地球システムの過去、現在、未来を明らかにするための基礎的データと知見を表明すべき時に来ていると思います。20世紀の末、21世紀に向けて地球化学の出番なのです。地球化学の健全な発展こそ現代社会の要望事項なのです。

地球化学会で講演するのは恐ろしいという人がいます。よく聞いてみると、論客が多く、高度な議論がなされ、打ちのめされてしまうからだとのこと。たしかに地球化学会では真剣に議論が為されていると思います。地球化学を担う次の世代を育てるために、真剣な中にも暖かい議論をしていくようにしようではありませんか。また、広く、大きな立場から地球化学の置かれている立場、地球化学の問題点を把握していくように皆で心がけて行きたいと思います。学問的な純粋さも必要ですが、多くの人々に理解され、サポートされていくような学問と学会を作っていかなければいけないと思います。

別の見方をすれば、地球化学会を開かれた学会にすることだと思います。他の分野、例えば地質関係の方々と自由に交流できることも大切です。地球化学の方々が地質学会その他で講演し、多くの方々から御意見をいただくのも一方法でしょう。今後はこのような点にも配慮したいと思います。

地球化学会それ自体としては、会員の皆様方が、地球化学会に属していてよかったという学会にしたいと考えています。幸なことに副会長、各役員とも有能な方々で構成されているので、今後の運営については心配ないと思っています。

地球化学会の先輩諸氏が残していった伝統を尊重すると共に、新しい視点を持った学会の運営をしていきたいと思っています。会員諸氏には御意見、御注文を評議員をはじめとする学会の担当者にお寄せいただくと共に、学会の発展のために、御協力をいただきたいと存じます。宇宙・地球の理解と地球に存在する全ての生命体の存在に資するために。

日本宇宙生物科学会第4回大会開催の御案内

- 1 会 期 平成2年10月12日(金)、13日(土)
- 2 会 場 名古屋大学東山キャンパス内
(名古屋市千種区不老町)
- 3 大会長 渡邊 悟(名古屋大学環境医学研究所)

お問合せ先: 〒464-01

名古屋市千種区不老町

名古屋大学環境医学研究所

日本宇宙生物科学会第4回大会

運営委員会事務局

学会事務局: 〒229

神奈川県相模原市由野台3-1-1

宇宙科学研究所

宇宙基地利用研究センター内

TEL (0427)51-3911 内線 2727

1990—1991年度 日本地球化学会 役員

会 長 綿祓邦彦

副会長 脇田 宏

監 事 鳥居鉄也

評議員 小倉紀雄 海老原充 金森 悟 北 逸郎

佐野有司 清水 洋 下山 晃 鈴木俊雄

高岡宣雄 高野穆一郎 立川 涼 田中 剛

角皆静男 中井信之 長尾啓介 野崎義行

野津憲治 半田暢彦 藤原祺多夫 松田准一

松久幸敬 柳 哮 吉田 稔

1990—1991年度 幹事会

会 長 綿祓邦彦

副会長 脇田 宏

庶 務 野津憲治

会 計 海老原充

編 集

G.J. 松久幸敬

地化 金森 悟

ニュース 高野穆一郎

行 事 清水 洋

1989年度第三回日本地球化学会

評議員会議事録

日 時：1989年10月2日 16時-19時

場 所：東京大学教養学部

出席者：一國雅巳会長，綿萩邦彦副会長，石渡良志，
謙岡一郎，小嶋 稔，日下部稔，
鈴木俊雄，鈴木 款，高野穆一郎，
田中 剛，角皆静男，中山英一郎，
野津憲治，水谷義彦，松久幸敬，
柳 哮，各評議員，鳥居鉄也幹事

I. 前回の議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 幹事会（高野評議員）

* 9月30日14:00-18:00に東京大学教養学部において幹事会を開き，次回評議員会および1989年度総会の議題の整理と検討を行った。一國会長，綿萩副会長，高野，野津，鈴木，石渡，小倉の各幹事が出席した。

2. 庶務（高野評議員）

* 文部省からG. J. Vol.23, No. 1 - 6 刊行費補助金134万円が交付された。

* 「1990 Western Pacific Geophysical Meeting」のための第二回関係学会合同会議に松尾禎士組織委員が出席し，準備状況および決定事項の報告がなされた。

3. 編集

（高野評議員松久評議員代理）

* G. J. Vol. 23, No. 1は発行済みである。No.2は印刷中で10月中には発行予定である。

（石渡評議員）

* 「地球化学」23巻1号は発行済みである。2号には8編の投稿があった。

4. 1989年度地球化学会年会

* 綿萩副会長（増田大会実行委員長代理）より準備状況について報告がなされた。

5. 学術会議

（高野評議員小倉評議員代理）

* 陸水研連は1993年国際水文会議（I A H S）第四回科学集会を日本で開催することを決定した。またI G B Pへの学術会議の公的対応機関に位置するI G B P分科会を設置することとなった。

編集者 高野穆一郎 〒153 東京都目黒区駒場3丁目8番1号 東京大学教養学部化学教室 電話 03(467)1171

発行所 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル（4F）

日本学会事務センター内 電話 東京 03 (817) 5801

6. その他

* 小嶋評議員からI A G Cの活動状況について報告があった。

III. 議 事

1. 入退会

* 入会（5名）加藤俊典 J. W. Hedenquist

吉田武義 仲川隆夫 安藤淳一

* 退会（19名）芦沢 竣 阿部修治 池田喜代治

鎌田政明 石森富太郎 古宇田涼一 大岸敏正

田島栄作 内海 喲 青山 勲 関陽太郎

猪股康行 岸 正美 渡辺紀元 中根周歩

本島公司 竹内真二 関野博一

以上を承認。会員現況は以下のとおり

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1989年5月	898	12	5	915
入会	5	0	0	5
退会	19	0	0	19
1989年8月	884	12	12	901

2. 1989年度総会について

* 1989年度総会議事次第について庶務幹事から提案があり承認された。

* 1988年度事業報告，決算報告，1989年度事業および会計中間報告，1990年度事業計画および予算案が承認された。

* 1989年度地球化学会役員選挙結果が報告され承認された。

3. 1990年度春季シンポジウムについて

* 1990年度春季シンポジウムは地球科学関連学会（地球電磁気・地球惑星圏学会，地震学会，日本火山学会，日本測地学会）合同大会として4月7日（土）に開催されるよう合同大会連絡会に働きかけることとした。

4. G. J. および「地球化学」の処分法について

* 各号100部を限定として学会事務センターで保管し，残部は年会期間中に会員に無料で配布することとした。

以上。

日本地球化学会ニュース

No. 121

1990. V. 21

1990年度年会は新潟大学で開催

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

日時 1990年10月3日(水)-5日(金)

会場 新潟大学教養部
新潟市五十嵐2の町8050

内容 一般講演
ポスターセッション
課題講演

- 1) 水系の物質移動
コンピーナー 水谷義彦 佐藤 修
- 2) 炭酸塩の地球化学
コンピーナー 一國雅巳 澤田 清
- 3) 放射性同位元素の地球化学
コンピーナー 角皆静男 橋本哲夫

講演申込み締切

6月20日(水) 必着

本号末尾の所定の申込み用紙を御使用下さい。

講演要旨原稿締切

8月18日(土) 必着

講演申込みの締切後，講演要旨原稿用紙をお送りします。

要旨集代 4000円

参加費 日本地球化学会会員 1000円

非会員 2000円，学生 無料

懇親会 10月4日(木) 18時から新潟大学生協第1食堂，
会費4000円(学生3000円)

要旨集予約，参加，懇親会，小集会申込み締切

9月14日(金)

送 金 要旨集代，参加費および懇親会費は9月14日までに郵便振替で御送金下さい。

郵便振替 新潟 0-3859

1990年度日本地球化学会年会

宿泊/航空券：別紙のように日本旅行 新潟支店(TEL 025-228-6031 or 6070, FAX 025-228-6814)が取り扱っております。同封の所定の申込み用紙を使用して直接お申込み下さい。

年会申込み先および連絡先

〒950-21 新潟市五十嵐2の町8050

新潟大学理学部化学教室内

1990年度日本地球化学会年会準備委員会

鈴木俊雄(電話 025-262-6266)

澤田 清(電話 025-262-6265)

1990年度日本地球化学会年会へ向けて

鈴木俊雄(新潟大理)

今年度の地球化学会年会が10月3日(水)~5日(金)に新潟大学教養部で開催することが決定されてから，現在そのための準備が着々と進められています。地元の一部の会員の間では，いつかは新潟で学会を開催してもいいのではないかという話は時折でてはいたので，今回の新潟での開催依頼があったときは，一同心よくひきうけた次第です。

新潟開催のPRをやって，できるだけ多くの参加者となるよう編集部からの依頼がありましたので，この紙面をかりて新潟のPRをしておきます。新潟県の県境は山並となっているため，例えば東京から新潟へ行くとすると，その山並を越えていかねばならず，距離以上に遠く感じて不便な所でした。最近御承知のように交通網が発達し，例えば東京からは新幹線でわずか1時間40分位で行くことができますし，また高速道路も発達しており，非常に行き易くなりました。会場となる新潟大学は新潟市郊外にありますが，比較的交通事情も良いので，それほど不便とはならない筈です。なお，学会が終わってから新潟の最大の観光の目玉である佐渡が島に渡るのも宜しいかと思います。他県の方が新潟へ来ると，「新潟は米がおいしい」，「酒も有名銘柄があり，おいしい」，「魚は新鮮，豊富でおいしい」等々云ってくれます。これは是非とも御期待下さい。

さて，新潟での地球化学学会の開催が決まって，早速地元の実行委員会を組織し，発足しました。ここでは学

会開催へ向けてのスケジュール、運営等協議しました。そのなかで学会の課題をどのようにもつかにして大部時間をかけて議論しました。現時点では次の課題が話にしております。

- (1) 水系の物質移動
- (2) 炭酸塩の地球化学
- (3) 放射性同位体を用いた地球化学

これについては、本号の地球化学学会ニュースで正式に公表してあります。これらの課題に関心のある方は是非とも応募をお願いします。

学会の運営その他については、地元の会員数が非常に少ないので心配ですが、幸い会員の皆さんが非常に協力的でしかも精力的に動いてくれるので、その心配もないものと思います。学会を地元で開催することは、地元の研究者に地球化学なるものについて認識を深めることができますし、それがとりもなおさず会員増につながります。また、地元の研究者の研究の相互理解を深めるにも役立ち、それが地元での研究活動の活発化につながります。

最後に会員の皆様で、今年度の新潟での学会のモチ方などについて、何か希望や意見などがありましたら、是非ともこちらによせて頂ければ幸いです。

この機会に是非とも新潟での地球化学会にご出席してくださいませよう願ひ致します。実行委員一同お待ちしております。

IGC ニュース No. 3

ファースト・サーキュラー発行

1990年2月
第29回万国地質学会議事務局

第4回組織委員会開催

去る1月23日に表記委員会が東京大学総合研究資料館で開かれ、和達清夫会長はじめ16人の組織委員が出席し、主にファースト・サーキュラーの内容についての議論がされました。またこの会議では、名誉総裁に皇族のどなたかに推戴をお願いする事を検討することになりました。

本委員会で新たに15名の組織委員が承認され、4名の小委員会委員長ならびに事務総長が選出されました。これにより、本会議の運営にあたる主要構成メンバーは以下のようになります。（*印は新任）

会 長	和 達 清 夫	東京地学協会
組織委員会委員長	佐 藤 正	筑波大学
事 務 総 長*	石 原 舜 三	地質調査所
事 務 局 長	本 座 栄 一	同
財務委員長	嶋 崎 吉 彦	日鉱探開(株)

小委員会委員長

科学プログラム小委員会	久 城 育 夫	東京大学
巡検小委員会	諏 訪 兼 位	名古屋大学
会場小委員会	西 村 進	京都大学
出版小委員会*	白波瀬輝夫	地質調査所
展示小委員会*	鞠 子 正	早稲田大学
	横 山 卓 雄	同志社大学
社交プログラム小委員会*	野 上 裕 生	京都大学
ジオホスト小委員会*	藤 井 敬 三	地質調査所

ファースト・サーキュラーの発行

いよいよ3月末日に、ファースト・サーキュラー（英文・和文抄訳付き）が発行されました。入手希望の方は個人でもグループでも結構ですので、下記の要領で直接事務局へお申し込み下さい。

ファーストサーキュラーにはさみ込まれているアンケート用紙に所定の事項を記入して、来る1990年7月15日までに提出下さい。国内外から送られてくるアンケートをもとに、企画内容を修正・改善し、セカンド・サーキュラーを作成致します。

〔申し込み方〕

官製はがき下記事項を明記して、下記事務局へお送り下さい。なお、電話またはFaxでのお申し込みはご遠慮下さい。

1. 氏 名
2. 連絡先住所（電話番号）
3. 部 数

〔連絡先〕

305 筑波学園郵便局私書箱65
第29回万国地質学会議事務局

今後のスケジュール予定

ファースト・サーキュラーが配布された後、会議開催までのスケジュールは次のような予定になっています。

1990年7月15日	ファースト・サーキュラーのアンケート提出期限
1991年4月1日	セカンド・サーキュラー送付
1992年1月1日	参加登録申し込み期限
同	アブストラクト投稿期限
同	前登録料納入期限
同	巡検・ショートコース・ワークショップ参加費予約納入期限
同	展示登録期限
1992年3月1日	サード・サーキュラー送付
1992年5月1日	巡検・ショートコース・ワークショップ参加費最終納入期限

登録料について

登録料は下記のような予定になっています。1992年1月1日までに登録料を払うと、事前登録の特典があり

ます。

	事前登録	会議場登録
会議参加者	45,000円	55,000円
同伴者	18,000円	22,000円
学生（1992年次）	15,000円	18,000円
非出席者（出版物等送付）	15,000円	

お知らせ

〇IGC（京都、1992年）

1992年8月24日から9月3日まで京都で開催される第29回IGC（万国地質学会議）の概要は、ニュースNo. 119でお知らせしましたが、この程1st circularができました。特別シンポジウム3テーマ20セッション、学際シンポジウム55セッション、領域的シンポジウム25領域約150セッションが予定されています。領域的セッションNo. 10は“Geochemistry”というタイトルで、次の5つのセッションが含まれています。

10. Geochemistry

- 10-1. Gas emission and fluid migration associated with seismic and volcanic activities.
- 10-2. Isotopic signatures of ocean water and marine deposits.
- 10-3. Reaction mechanisms of water-rock interaction.
- 10-4. Noble gas isotopes in magmatic processes.
- 10-5. Oxygen fugacity indicators in rocks and minerals.

このほかにも、地球化学に関連の深いシンポジウムが多数用意されています。

1st circular ご希望の方は、下記の事務局へハガキにてご請求下さい。

〒305 筑波学園郵便局私書箱65
IGC-92 事務局 （庶務）

〇本田奨励金派遣候補者決まる

第7回地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議（オーストラリア Canberra, 1990年9月24日～29日）に出席する若手研究者の渡航費援助を目的とした本田奨励金の選考会が、去る3月26日から28日、箱根で開かれた質量分析学会同位体比部会研究会の席を借りて行われ、22名の応募者のうちから、下記の11名の派遣候補者と1名の補欠を選んだ。派遣研究者は、国際会議のプログラム決定後に最終決定される。

派遣候補者（11名、アイウエオ順）

吾妻 瞬一、石橋純一郎、植田 千秋、
氏家 真澄、佐野 有司、富樫 茂子、
鳥越 紀子、橋爪 光、比屋根 肇、
藤井マウロ、藤林 紀枝

補 欠

二神 常爾

〇1990年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」の受賞候補者および研究助成受領候補者の推薦依頼

下記の推薦依頼がありました。

三 宅 賞

1. 本賞は地球化学に顕著な研究業績をおさめた科学者に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞牌および賞金（30万円）をそえます。
3. 本賞の贈呈は、1年1件（1名）とします。
4. 同封用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由（400字程度）、主な論文10編程度に略歴をそえて、協会事務局までお送り下さい。

研究助成

1. 研究助成は地球化学の研究者で、海外のシンポジウム等に出席し論文を発表する者に対して行われます。
2. 助成金は1件10万円とし、年に3件とします。
3. 同封用紙に推薦対象者（各締切日において満40歳までとする）の略歴、研究業績、助成金使用目的、国際会議名（年月日、場所）、論文題目、推薦理由等を記入して、協会事務局までお送り下さい。

申込み締切日は、三宅賞は、1990年9月5日（水）・研究助成は、第1回締切1990年9月5日（水）、第2回締切1991年1月末日。

申込先は、地球化学研究協会

〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217
☎03-330-2455

「地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)の実施について(勧告)」を採択

平成2年5月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る4月18日から20日まで第109回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、その総会で採択された勧告を中心に、同総会の議事内容等についてお知らせします。

日本学術会議第109回総会報告

日本学術会議第109回総会(第14期・第5回)は、4月18~20日の3日間開催された。

総会第1日目の午前中には、会長からの経過報告、各部委員会報告に続き、勧告、対外報告の2案件の提案がなされた。これらの案件については、同日午後の各部会での審議を経た上で、第2日目の午前中に採択された。なお、総会前日の17日の午前中には、連合部会が開催され、これらの案件の予備的な説明、質疑が行われた。また、第2日目の午後には、自由討議が、第3日目の午前中には各常置委員会が、午後には各特別委員会がそれぞれ開催された。なお、第2日目の総会に先立ち、同日表敬訪問のために訪れた1990年(第6回)日本国際賞受賞者4名の紹介がなされ、うち2名の方々から挨拶が行われた。

今回総会では、次の勧告、対外報告が採択された。

①地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)の実施について(勧告)(この勧告の詳細は、別掲参照)

このIGBPについては、以前から会長召集の検討会議や関係する部会、研究連絡委員会等で検討が続けられてきたが、この度、これらの検討結果を踏まえて、人間活動と地球環境に関する特別委員会のIGBP分科会が中心となって今回の勧告案を取りまとめたものである。

この勧告は、同日午後直ちに内閣総理大臣に提出され、関係省庁に送付された。

②人間活動と地球環境に関する特別委員会報告—人間活動と地球環境について(この対外報告の詳細は、別掲参照)

これは、人間活動と地球環境に関する特別委員会が、昭和63年10月の発足以来行ってきた審議の結果を中間報告として取りまとめたものについて、外部に発表することを承認したものである。この件に関する審議の際には、人間活動という言葉の定義、国際関係や各国の科学技術政策との関連、環境教育の位置付け等々について、活発な質疑応答があり、また、文案の修正を求める多くの意見が出される等、熱心な討議が行われた。

また、総会第2日目の午前には、南アフリカ共和国科学者の学術に係る我が国への入国手続きをめぐる従来からの問題について討議が行われ、「科学者の自由交流」の考え方に賛同し、本問題の早急かつ実質的な解決を望む多数の意見が述べられた。

なお、第2日目午後には、「学術の国際化への対応」というテーマで、活発な自由討議が行われた(この自由討議の詳細は、別掲参照)。

地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)の実施について(勧告)

(勧告本文)

国際学術連合会議(ICSU)は、1983年1月の執行委員会から、国際測地学・地球物理学連合(IUGG)より提案のあった地球圏—生物圏国際協同研究計画(International Geosphere-Biosphere Programme, 略称IGBP)について検討を始め、1986年ベルンで開かれた総会で、この計画を1990年から10年間国際協力により実施することを決定した。我が国の研究者は国際的立案の段階からこの研究計画の審議に参加してきており、この国際協力事業に我が国の研究者が参加することは、この国際協同研究計画が持つ重要性にかんがみ意義が極めて大きいと考えられる。したがって政府はこの国際的かつ学際的事業を成功させるために、我が国におけるIGBP研究の実施に当たり、研究の推進、国際対応、研究者の養成などの体制整備並びに予算等万全の措置を講じられたい。

(説明)[要旨]

国際学術連合会議(ICSU)は、国際協同研究として、地球変化を支配する物理的・化学的・生物学的な諸過程とその相互作用を解明するため専門的知識を結集し、「地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)を実施するため、検討を行ってきた。我が国の研究者は関係する国際委員会に参画し積極的にその役割を果たしてきた。

IGBPの目的は金地球を支配する物理的・化学的・生物学的諸過程とその相互作用を究明することによって、過去から現在、未来にいたるまでの生命を生み出している地球独特の環境とその変化、さらに人間活動による変化について解明し、記述し、理解することである。

我が国における実施計画は、国際的な計画を参照しつつ、次の7研究領域を設定した。

研究領域1: 大気微量成分の変動及び生物圏との交換。

研究領域2: 海洋における物質循環と生物生産。

研究領域3: 陸上生物群衆への気候変化の影響。

研究領域4: 大気圏・水圏・陸圏と生物圏の相互作用を考慮した気候解析とモデリング。

研究領域5: 環境変化のモニタリング

研究領域6: 古環境の変遷。

研究領域7: 地球環境と人間活動の相互作用。

本研究計画は1990年から10年間行われ、日本は広義のモンスーンアジア地域、西太平洋地域、極域に特に重点を置いて研究を実施する。また、効果的に推進するため、地球システムにかかわる他の国際協同研究とも協力する。

1990年度地球化学会年会

[A] 講演申込用紙

6月20日(水) 必着

演題

氏名

(発表者に○をつけて下さい)

所属(略記)

○課題講演を御希望の場合は、次の何れかを○で囲んで下さい。

課題講演(口頭発表): 課題1, 課題2, 課題3

○一般講演の御希望の場合は、次のそれぞれのいずれかを○で囲んで下さい。

発表形式: 口頭, ポスター, どちらでもよい

発表分野: 大気・降水, 岩石・地殻, 鉱床, 有機物, 生物, 陸水, 温泉, 熱水, 地球外物質, 海洋, 堆積物, 火山,

その他()

○プログラム編成のため、発表内容を簡単に記して下さい。

○例にならって英文で、氏名、所属機関名、演題を書いて下さい。

(必ずタイプもしくはワープロにしてください。)

例: T. Tokyo and J. Niigata (Fuji Univ., Niigata Univ.) Geochemical studies of hot springs.

○返送用(上記と同じものをお書き下さい)

演題

氏名(所属)

住所 〒

氏名

様

1990 年度地球化学会年会

[B] 参加申込用紙

9月14日(金) 必着

ふりがな
氏 名

所 属

連絡先(自宅・勤務先)

〒

○参加登録(いずれかを○で囲んで下さい)

講 演: 有 無

要旨集: 要 4,000円 不要

懇親会: 参加・一般 4,000円 不参加

参加・学生 3,000円

送金合計 円

○送金先

郵便振替 新潟 0-3859

1990年度 日本地球化学会年会

送金日 月 日

○要旨集送付先(必ず御記入下さい)

住所 〒

氏名

様

○送付先

〒950-21 新潟市五十嵐2の町 8050

新潟大学理学部

日本地球化学会年会準備委員会

鈴木 俊 雄

人間活動と地球環境に関する特別委員会報告 —人間活動と地球環境について（要旨）

人間活動とそれを取りまく環境については、ギリシャ・ローマ時代以来考察されてきた。最近に至り、工業化や都市化が早い速度で展開し、その影響は局地的にとどまらず、地球規模で進行し、地球環境の急速な変化が現れてきた。特に、二酸化炭素や微量気体の温室効果に起因する地球温暖化、酸性雨、砂漠化などさまざまな環境変化が現れている。そしてその進行速度が大で、人間として対応、適応または順化しうる変化の速度の限界を越しているところに問題がある。

地球規模の環境変化研究の国際的プロジェクトとして「地球圏—生物圏国際協同研究計画（IGBP）」があり、少し遅れて実施される予定の「地球変化の人類次元研究計画（仮称）（HDGCP）」がある。

問題を解決するためには、人間活動と地球環境を一つの系としてとらえ、そこにおける物質循環やエネルギー変化の定量的記述に基づき、あるべき姿を検討し、新しい技術体系や政策体系を構築する。そこでは、総合的な研究体制を構築するプログラムを用意する必要がある。このような新しいしかも長期的な研究を推進するためには、研究者の養成、教育体系の検討、全学術研究体系の整備が必要である。

総会中の自由討議—学術の国際化への対応

本会議総会中の行事の一環である自由討議が、総会2日目の4月19日の午後1時から3時間にわたり開催された。今回の課題は、「学術の国際化への対応」であった。

自由討議は、大石泰彦副会長の司会のもと、はじめに話題提供として、①川田侃第2部会員から「学術の国際化への対応—政治学の場合」について、②高柳和夫第4部会員から「学術における国際対応—理学の場合」について、③松本順一郎第5部会員から「日本学術会議と国際学術協力」について、それぞれ意見の発表がなされた。

続いて、会員間で多岐多様にわたり活発な討議が行われたが、その際述べられた意見の主なものを項目として列挙すると、「日本全体の国際学術交流・協力事業に占める日本学術会議の位置付け、役割」、「特に発展途上国からの研究者、留学生の受入れ問題」、「ユネスコ関係の諸活動・事業への対応の在り方」、「日本学術会議が加入している各国国際学術団体への対応の個別的な現状と問題点」、「新しい国際協力事業への日本学術会議の対応の在り方」、「日本学術会議の国際対応組織の整備・強化」等であった。

経営工学研究連絡委員会報告—経営工学の体系化に向けて（要旨）

固有技術とよく調和した管理技術の体系を明確にし、この体系の研究を進めて行くことは高度技術社会における社会組織と企業経営のあり方を検討するのに重要な意義を有する。

今までも、経営工学は日本の経済、社会及び技術の発展段階において、その役割を果たし、日本経済の発展に貢献してきた。とくに日本製品の品質と生産性と向上に果たした経営工学の役割は広く内外において高く評価されているところである。

経営工学の理論と応用の研究は、その実学的な性格もあり、企業における工学・技術を基盤とする経営管理活動に

重点がおかれていたが、経営工学の理論は広い普遍性を有しているので、今後は広く社会や国際に関する問題にも応用されなければならない。

本報告は、このような意図の下に、経営工学研究連絡委員会に参加している4学会の代表者よりなるワーキンググループの協力の下に、経営工学の役割と学問的体系を整理し、その研究と教育のあり方と今後の展開を考察したものである。

生物物理学研究連絡委員会報告—生物物理学の新しい研究体制について（要旨）

生物科学の急速な進展の中で生物物理学は生物機能のメカニズムを物理学的に解明し、生物科学全体の基礎を形づくる学問として、多くの貢献をしてきた。今後生命現象の基本的理解をめざすのみならず、バイオテクノロジーの基盤となるべく、生物物理学の役割はますます大きい。

このような状況の下で、生物物理学の一層の発展をはかるには、以下のような新しい研究体制をつくることが望ましい。

現段階で特に集中的総合的に研究を推進すべき分野として、(A)分子機能解析 (B)生物情報解析 (C)高次情報解析の三つをとり上げる。それぞれの分野に適合した場所に研究室群（研究センター）をおき、それらが相互に連携し、一つの研究組織を作る。さらにこの組織が物理的方法を軸として新しい大型の研究設備のシステムを備える。そして将来この体制が基礎生物科学の研究体制の重要な一環となることをめざす。

日本学術会議第15期会員選出のための学術研究団体の登録について

現在、日本学術会議会員推薦管理会では、各学術研究団体から、第15期会員選出のための日本学術会議への「登録」申請の受付を行なっています。この「登録」は、期が変わる度に行う必要があり、従って、第14期における登録学術研究団体も第15期会員選出のための登録学術研究団体となるためには、改めて第15期の「登録」が必要です。

この「登録」申請を行うためには、所定の様式による「学術研究団体登録申請書」を、平成2年6月30日（土）までに日本学術会議会員推薦管理会に到達するように提出する必要があります。

「学術研究団体登録申請書」は、所定の様式と用紙がありますので、日本学術会議会員推薦管理会に請求してください。無料で送付します。

日学双書の刊行案内

日本学術会議主催公開講演会の記録を中心に編集された次の日学双書が刊行されました。

●日学双書 No.6 「高齢社会をどう生きるか」

●日学双書 No.9 「“人権の歩み”から何を学ぶか」

[定価] 両書とも、1,000円（消費税込み）

※問い合わせ先：（財）日本学術協力財団（〒106 東京都港区西麻布3-24-20、交通安全教育センタービル内、電話03-403-9788）

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(403)6291

1989年度第四回日本地球化学会
評議員会議事録

日 時：1989年12月9日

場 所：東京大学教養学部

出席者：一國雅巳会長 綿祓邦彦副会長

鳥居鉄也監事 石渡良志 大隅多加志
小倉紀雄 兼岡一郎 日下部実
鈴木 款 高野穆一郎 田中 剛
坪田博行 角皆静男 野津憲治
松久幸敬 柳 哮 海老原充
金森 悟 清水 洋 高岡宣雄
立川 涼 半田暢彦 藤原祺多夫
松田准一 吉田 稔 脇田 宏

I. 前回の議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 幹事会（高野評議員）

*10月23日東京大学理学部において臨時幹事会を、また12月2日に東京大学教養学部において定例幹事会を開き、それぞれIGCへの対応と次回評議員会の議題の整理と検討を行った。一国会長、石渡、小倉、高野、野津、松久評議員（10/23）および一国会長、石渡、小倉、高野、野津、松久評議員（12/2）が出席した。

2. 庶務（高野評議員）

*文部省へG. J. Vol. 24, No. 1-6への刊行補助申請書を12月7日提出した。

3. 編集

（松久評議員）

*G. J. No. 2は12月2日に印刷終了、No. 3は著者校正段階、No. 4は年末までに印刷に回る予定。No. 5,6のどちらかを特集号に当てる。

（石渡評議員）

*「地球化学」Vol. 23, No. 2は年内に発送予定。

4. ニュース（鈴木評議員）

*No. 119は12月20日頃発送予定。

5. 行事（小倉評議員）

*1990年度春季シンポジウムは地球惑星科学関連学会合同大会の一環として4月7日（土）に東京工業大学で行われる予定。

6. その他

（清水会員増田評議員代理）

*1989年度地球化学会年会の報告がなされた。

（松久評議員）

*WPGMのプログラム委員としての活動報告がなされた。

*IGCのプログラム委員として地球化学会からは野

崎、脇田、松久会員が参加している。顧問会議および組織委員会への委員の選出が必要である。

III. 議 事

1. 入退会

*入会（6名） 浅利 宏 大本 洋 竹下 徹
中田正隆 八木一行 吉田 聡

*退会（1名） 坪井誠太郎（逝去）

以上を承認。会員現況は以下の通り。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1989年 9月	884	12	5	901
入会	6	0	0	6
退会	1	0	0	1
1989年10月	889	12	5	906

2. 学術会議関係

*脇田地質科学総合研連委員から審査細目の検討依頼が研連宛にきているとの報告があり、12月20日締切に間に合うよう関係者の間で協議し回答することとした。以上

近刊書紹介・書評

炭酸塩堆積物の地球化学

生物の生存環境の形成と発展

著者 北野 康

定価4944円、391頁、1990年、東海大学出版社

副題にもあるように、堆積物としての炭酸塩岩を中心に、実験室的手法から大気中の二酸化炭素の問題まで幅広い領域をカバーしており、地球の温暖化が社会問題の一つとなっている昨今、適宜を得た著書である。前半においては、炭酸塩岩の生成機構、組成、二次的変化および水圏との相互作用等について、豊富なデータに基づき詳しく解析、解釈が記述されている。後半においては地球環境との関わりにおいて、原始大気・海水からの変遷および今日の大気の問題を、著者の主張を含め記されている。“まえがき”にもあるように、引用の40%が著者の文献から成っており、かなり専門性の高い部分もあり、他の入門成書との相補的内容も含まれている。

（澤田 清・新潟大理）

【書 評】

フロンー地球を蝕む物質ー

富永 健、巻出義紘、F. S. ローランド著

定価1442円、160頁、1990年、東京大学出版会

工業技術が我々の日常生活を支えていると云っても過言ではない今日、開発当初には大変便利な製品も人類の広範囲に用い出すと意外なところに落とし穴が待っていた

ということがしばしばある。冷蔵庫やエアコンの冷媒、ヘアースプレーの噴射ガスなどに使用されているフロンは、その最もよい例であろう。このフロンがオゾン層の破壊を引き起こし、地球規模の環境破壊を招くという警告がしばしばマスコミに取り上げられるようになってから、まだ日は浅い。それ故、フロン問題の存在を知ってはいても、新聞やテレビの報道から得られる情報以上にその実態を知っている人は、極めて限られているのが現状である。

その意味では本書は大変よい時期に出版された。著者は全てフロンに関する第一線の研究者であり、「一般の人々から専門外の科学者まで広い読者を対象とした」とあるように、大変平易に書かれている。内容は、全7章からなり、付録としてモントリオール議定書、ヘルシンキ宣言、およびオゾン・フロン問題年表が加えられている。第1章の「クロロフルオロカーボンと成層圏オゾン」では、25頁にわたって多様な問題の全体像の流れに沿って書かれていて、大変読みやすい。とくにラブロックの大気中フロンの最初の測定結果に着目し、あえて放射化学からはやや細いフロンの大気中での除去過程の研究に着手し、成層圏での紫外線によるフロンの分解と塩素の放出のメカニズムを解明した時点で、この問題が「単なる科学的興味からの謎解きから、重要な地球環境問題へ変わった」ことを気付くくだりは、科学者のみが味わうことのできる興奮を感じとることができる。第2章以後は、個々の問題をさらに詳しく解説し、よく吟味された図表がほとんどよく配置されていて、付録も含めて専門家にも役立つ資料ともなっている。また、記述の誤りや誤植もほとんどない。

しかし、本書は、読物にして見た場合多少違和感を覚えるところがある。それは第1章が、あまりに詳しく書かれているために、第2章以後で再び問題をとり上げる際に重複した、あるいは幾分新鮮さに欠ける感じをうけることである。その意味では、第3章「大気中で増え続けるフロン」では、著者ら自身の航空機や気球を使った成層圏での観測が紹介されているが、その際の「苦労話」が加えられているのもっとよかったと思う。もう一つ気になる点は、第5章「フロンの環境への影響」のところでは植物や海の生物の影響について一歩踏み込んだ記述がなされていることである。ここでは最近のいくつかの研究例をあげているが、「オゾン量が16%減少すると漁獲が6~9%減る」といったことについては、その科学的根拠や算定方法について専門家の意見がわかるところであろう。ややもすると読者に誤解を与えかねない気もする。

ともあれ本書は、著者が複数であるにも拘らず全体的によくまとまっていて、オゾン・フロン問題についてか

なりの深い知識を得ることができる。また、それにも増して地球環境問題の代表格として、その仕組みや対策を理解することは、読者にとって大変有意義なことであろう。（東大海洋研 野崎義行）

一奇人変人の話一

先日、某大企業研究所の研究員の方が、我々の教室で講演をされた。講演内容は、“構造主義”などという言葉のでてくる一種の哲学であり、地球科学科での講演にしては珍しく非常にユニークなものであった。大変に失礼な話だが、その講演者は大変変わった人であった。自らは「自分は研究所の二大奇人の一人である」と話されていたのだからまちがいないであろう。私はこの講演にいたく感激した。それは講演の内容（構造主義などはチンプンカンプンです）ではなく、大企業がこういう奇人変人（？）を抱えているという現実に対してである。企業は、こういう人たちの新しい考え方の重要性を十分認識している。そして、彼らの新しい発想が将来企業利益につながることを期待して、そういうスタッフを自分の研究所に抱えているわけである。なんとという余裕であろう！日本の企業も大したものだと、あらためて世界に冠たる日本の経済力に感じいったのである。

昔は、大学にこういう一風変わった奇人変人がいたものである。電車の中でも傘をさして本を読んでいたという先生もいたそうだ。ところが、最近では、大学にはまともな人が多くなってきた様な気がする。そして、こういう奇人変人は大企業の研究所が抱えるようになってきたのである。「大学人のサラリーマン化」ということが言われて久しいが、今やサラリーマンの人の方にむしろユニークで面白い人がいるという現象になっている。

これは、何故だろうと考えたが、大学に余裕がなくなってきた証拠であろう。この10年間の大学と民間の研究費の伸びの違いを見れば雲泥の差があることがわかる。今では明らかに民間の研究所の方が莫大な研究費を使えるようだ。そして、大学では、研究費を得るため科研費の申請書類を書くのに時間をとられたり、海外に学術調査に行く際にはその費用の申請のための大量の書類を書かなければならない羽目になる。結局、申請書をいかに効率よく、かつアピールするように書くか（これも大事なことでしょうが）というような行政能力も問われることになる。そして、科研費の申請書も書かず、ぼーと宇宙や地球のことを考えている人は、論文の数も増えず、ポストもなかなか得られず、自然淘汰されてしまったのだ。昔は、大学に金銭的にも精神的にも余裕があってこういう人にも研究する場所が与えられていたのだが、現在では数少なくなってしまったのではないだろうか。本当に独創性のある新しい研究を推進させるためには、政

府は大学にもっと研究費とポストを増やし、こういう奇人変人を抱えるだけの余裕をもたせてほしいと思う。少なくとも日本地球化学会は、いつまでもこういう奇人変人を抱えるだけの（金銭的には無理でしょうが、精神的には）余裕のある学会でいてほしいものだ。

なお、最後に一言、かく書いている私本人は、奇人変人ではなく、行政能力も多いにある（!?）普通人です
ので、学会の懇親会であったときなどはそのように対応してください。
（神戸大学 松田 准一）

勤務先等の変更はすみやかにご連絡下さい！

勤務先の変更、自宅住所の変更など名簿記載事項に変更が生じた会員は、忘れずに下記の事務局へご連絡下さい。学生の会員が就職した場合もご連絡下さい。

なお変更届用紙は会員名簿に挟み込まれています。

〒113 東京都文京区弥生 2-4-16

日本学会事務センター内

日本地球化学会

Tel. 03-817-5801

編集者 高野穆一郎 〒153 東京都目黒区駒場 3丁目 8番 1号 東京大学教養学部化学教室 電話 03 (467) 1171

発行者 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル (4F)

日本学会事務センター内 電話 東京 03 (817) 5801

日本地球化学会ニュース

No. 122

1990. VIII. 1

1990年度 日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

日 時：10月3日(水)～5日(金)

会 場：新潟大学教養部（新潟市五十嵐2の町 8050）

年会準備委員会：新潟大学理学部化学教室 鈴木俊雄

新潟市五十嵐2の町 8050 （電話 025-262-6266）

参加費：学会会員 1,000円、会員外 2,000円、学生 無料

講演要旨集代：1冊 4,000円

問合せ先：〒950-21 新潟市五十嵐2の町 8050 新潟大学理学部化学教室

1990年度日本地球化学会年会準備委員会 鈴木俊雄・沢田 清

（電話 025-262-6266, 025-262-6265）

会場	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
3日 (水)	A	受 付 (8.30～)	一般講演 (大気・降水)			一般講演 (大気・降水)					
	B		一般講演 (温泉・熱水・鉱床)			一般講演 (温泉・熱水・鉱床)					
	C		一般講演 (地球外物質)			一般講演 (地球外物質)					
	D		一般講演 (海 洋)			一般講演 (海 洋)					
4日 (木)	A	課題講演 (水系の物質移動)				一般講演 (大気・降水)		特 別 講 演 (15.40～) E会場	総 会 (16.30～) E会場	学 会 賞 受 賞 講 演 (17.20～) E会場	懇 親 会 (18～20) 生協第 食堂
	B	課題講演 (炭素塩の地球化学)				課題講演 (炭素塩の地球化学)					
	C	課題講演 (放射性同位元素の地球化学)				課題講演 (放射性同位元素の 地球化学)					
	D	一般講演 (有機物・生物)				一般講演 (有機物・生物)					
5日 (金)	A	一般講演 (火 山)		ポ ス タ ー セ ッ シ ョ ン 討 論 時 間 P会場		一般講演 (有機物・生物)					
	B	一般講演 (岩石・地殻)				一般講演 (岩石・地殻)					
	C	一般講演 (堆 積 物)				一般講演 (堆積物)					
	D	一般講演 (陸 水)				一般講演 (陸 水)					

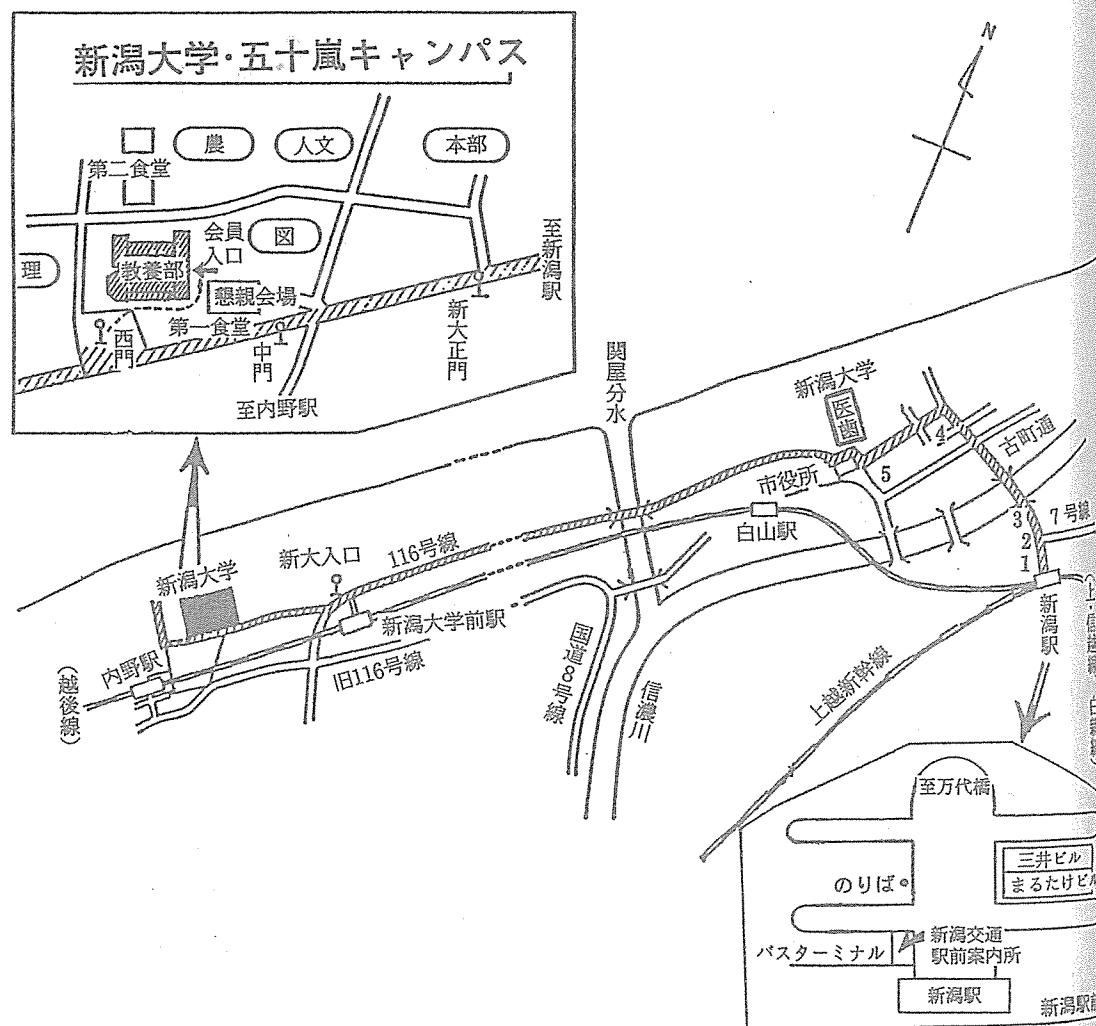
講演時間(討論時間を含む)：一般講演15分、課題講演15～20分

懇親会：10月4日(木) 18時～20時、新潟大学生協第1食堂

会費 4,000円(学生 3,000円)

年会会場（新潟大学五十嵐キャンパス）案内

1. JR 新潟駅(万代口)より、バス「新潟大学前」行き、または「内野」(新潟大学五十嵐2の町経由)行きにて、新潟大学西門下車。所要時間約45分、380円。市中心部での乗車地点は、下図の1～5の5箇所です。
(1: 新潟駅前、2: 駅前通り、2: 万代シティバスセンター前、4: 古町、5: 市役所前)
2. JR 越後線新潟大学前駅または内野駅^{ウチノ}から徒歩約15分です。
3. 会場への一般車は構内駐車できません。



第1日 10月3日

A会場

一般講演 [大気・降水]

(9:30~10:45) 座長 松本英二

- 1A01 船橋市における雨水の化学成分 (東邦大理)
○大森禎子・吉池雄蔵・岡村 忍・岩崎岩次
- 1A02 日本の12地点の降水中の化学成分について (気象研)
○高谷祐吉・廣瀬勝己・杉村行勇
- 1A03 首都圏における雨水中の化学成分濃度の地域的特徴 (慶応大理工・気象大*・慶応大環境情報**・慶応女子高校***)
○荻原隆朗・岡安俊樹・田中 茂・橋本芳一・土器屋由起子*・丸田恵美子**, 田村定義***
- 1A04 新潟県における降水成分降下量の季節及び地域変動 (新潟県衛生公害研)
○福崎紀夫・大泉毅
- 1A05 南極みずほ高原の積雪中の化学成分 (名大水圏研・国立極地研*・国立公害研**) 金森暢子・金森 悟・瀬古勝基・吉川晶雄・渡辺興亜*・西川雅高**
- (11:00~12:00) 座長 田中 茂
- 1A06 雨水中に含まれる塵の Sr 同位体組成 (九大理)
○窪田正和・柳 哮
- 1A07 大気中の水蒸気と二酸化炭素の H, C, O 同位体比測定 (富山大理)
○米口敬浩・吉田尚弘
- 1A08 筑波において観測された地表付近の CO₂ 濃度について (気象研地球化学)
○井上久幸・杉村行勇
- 1A09 杉材 δ¹³C 値の変化—人間活動の影響 (名大水圏研)
○北川浩之・松本英二

一般講演 [大気・降水]

(13:15~14:15) 座長 河村公隆

- 1A10 微量試料¹⁴C 測定—加速器質量分析用ターゲットの作成法 (名大水圏研・名大年代測定センター*)
○北川浩之・増沢敏行・松本英二・中村俊夫*
- 1A11 和紙試料中の炭素同位体記録 (国立環境研)
○田中 敦・白石寛明・相馬光之
- 1A12 北大西洋上における硫黄化合物の濃度分布とその起源 (慶応大理工) 町田基宏・清水啓見・田中 茂・橋本芳一
- 1A13 大気中のガス状金属化合物の発生源についての考察 (近畿大理工)
○平木敬三・中口 譲・小松 圭・青野辰雄
- (14:30~15:30) 座長 平喜敬三
- 1A14 北大西洋上における海塩粒子と酸性ガスとの反

応 (慶応大理工) ○渡辺和章・町田基宏・田中 茂・橋本芳一

- 1A15 サハラ砂漠からの土壌粒子の北大西洋への長距離輸送移動 (慶応大理工)
○益子 治・岡森克高・田中 茂・橋本芳一
- 1A16 太平洋上広域上層大気微量化学成分の分布 (INSTAC) (気象研地球化学)
○杉村行勇・井上久幸・松枝秀和・牧野行雄・池上三和子・近藤 豊
- 1A17 南極エアロゾル中の微量成分 (名大水圏研・国立公害研*・国立極地研**) 金森 悟・金森暢子・西川雅高*・青木周司・渡辺興亜**
- (15:45~17:00) 座長 松枝秀和
- 1A18 アジア各地域における大気中の鉛の安定同位体比 (国立公害研・埼玉大*・中国環境科学研**・貴州省環境保護科学研***)
○向井人史・安部喜也・藤井敏博・坂本和彦*・陳 宗良**・範 增華***
- 1A19 しらせ船上における軽炭化水素の測定 (国立公害研) 清水 明・酒巻史郎
- 1A20 北極大気中の炭化水素の分布と季節変化 (都立大理・Environ. Canada*)
○坂口 太・河村公隆・L. A. Barrie*
- 1A21 北極大気中の低分子ジカルボン酸の分布と季節変化 (都立大理・Environ. Canada*)
○河村公隆・安井 治・L. A. Barrie*
- 1A22 都市大気中の低分子ジカルボン酸濃度の時間変化 (都立大理)
○安井 治・河村公隆

B会場

一般講演 [温泉・熱水・鉱床]

(9:30~10:45) 座長 日下部実

- 1B01 イオンクロマトグラフィーを用いた環境試料水中の陰イオンの定量 (鹿児島大理) 坂元隼雄・満窪文彦・富安卓滋・米原範伸
- 1B02 雄阿寒湯の滝のマンガン酸化環境と酸化細菌の検出 (地調・筑波大 地球科学*・微生物工業技術研**) 三田直樹・伊藤 孝*・氏家真澄・丸山明彦**
- 1B03 いくつかの温泉水の希土類元素パターン (上智大理工・武蔵工大原研*)
○掛川一樹・木川田喜一・小坂知子・大井隆夫・垣花秀武・本多照幸*
- 1B04 鹿児島県新湯における温泉水と噴気ガスの化学組成 (鹿児島大理)
○坂元隼雄・満窪文彦・富安卓滋・米原範伸
- 1B05 草津白根火山周辺の温泉水の硫黄同位体比 (岡

山大理・東工大理*・玉川大**・岡山大地球研***) ○山本雅弘・小池孝治・榎井文人・野上健治*・小坂丈予**・日下部実***

(11:00~12:00) 座長 鹿園直建

1B06 山梨県北部花崗岩体から湧出している温泉水(青山学院大理工・岡山大地球研*) ○矢板 毅・大関香織・木村 幹・日下部実*

1B07 焼山付近の温泉について(中央温泉研・志賀ボーリング*) ○佐藤幸二・園田和彦*・竹内富士夫*

1B08 1989年伊豆半島東方沖の地震火山活動と伊東における温泉観測(東大理) ○佐藤 努・五十嵐丈二・野津憲治・脇田 宏

1B09 岩石過剰の条件下における塩酸水溶液と火山岩の反応過程(東工大理) ○長谷川達志・吉田稔

一般講演[温泉・熱水・鉱床]

(13:15~14:15) 座長 脇田 宏

1B10 チムニーの生成メカニズム(慶応大理工・岡山大地球研) ○鹿園直建・日下部実

1B11 伊豆大島小清水湧水井付近に異常な地下水温上昇をもたらした熱水の成因について(地調) ○高橋正明・阿部喜久男・野田徹郎・風早康平・安藤直行

1B12 海洋地殻の硫黄含有量及び同位体・トルードス・オフィオライト(地調・トロント大・岡山大) ○川幡穂高・S. D. Scott・日下部実

1B13 タイ北部の温泉ガスの化学及び同位体特性からみた地熱源(秋田大鉱山・岡山大地球研*・Chaingmai Univ**) ○北 逸郎・長尾敬介*・新田恒造・B. Ratanasthien**

1B14 九州の地熱帯に放出される気体の化学および同位体特性(秋田大鉱山・福岡大理*・岡山大地球研**・西日本技術***) ○北 逸郎・田口幸洋*・新田恒造・長尾敬介**・古賀昭人***

(14:30~15:30) 座長 垣内正久

1B15 タイ北部の温泉ガスの希ガス同位体組成からみた地熱源(岡山大地球研・秋田大鉱山*・Chaingmai Univ**) ○長尾敬介・北 逸郎*・B. Ratanasthien**

1B16 霧島・滝上地熱地帯のワイラカイトの酸素同位体比(岡山大地球研) ○能登征美・日下部実

1B17 沖縄トラフ海底熱水中の溶存アミノ酸(横浜国大工・三菱化成生命研*・東大海洋研**) ○小林憲正・内藤洋一・柳川弘志*・土屋正彦・蒲生俊敬**・酒井 均**

1B18 スメクタイトと重金属の熱水反応(函館工専)

○水上正勝・大森幸子

(15:45~17:00) 座長 坂元隼雄

1B19 断層粘土中の希元素存在度(地調) 田中 剛・柴田 賢・青山秀喜

1B20 塩化ナトリウム水溶液における水素同位体分別の温度依存性(学習院大理) ○垣内正久

1B21 150℃での Au₁₀Ag₉₀ 合金と NaHS 水溶液との反応(東京学芸大教育・慶応大地学*・東大生産研**) ○中田正隆・鹿園直建*・本間久英・白木亮司**

1B22 150℃での塩酸溶液に対する金の溶解(東京学芸大教育・慶応大地学*) ○中田正隆・鹿園直建*・本間久英

1B23 希ガス同位体に基づいた大陸および海洋地域のリソスフェアの進化の比較(東大地震研・山形大理) ○兼岡一郎・高岡宣雄

C会場

一般講演[地球外物質]

(9:30~10:45) 座長 中村 昇

1C01 炭素質隕石中の非抽出性炭素質物質(東大理) ○北島富美雄・増田彰正

1C02 エレイライト中の高分子炭素質物質の構造(東大理・理研*) ○北島富美雄・松浦由美子・井江達士・高橋和也*・清水 洋・増田彰正

1C03 南極炭素質コンドライト中の炭素量とその安定同位体比(筑波大化・秋田大鉱山) ○下山 晃・奈良岡浩・松葉谷治・原田 馨

1C04 南極産あすか炭素質コンドライト中の抽出性有機化合物(筑波大化) ○奈良岡浩・下山 晃・原田 馨

1C05 南極産 CI および CM コンドライト中の有機物の熱分析-質量分析法による研究(筑波大化) ○古宮正利・下山 晃・原田 馨

(11:00~12:00) 座長 米田成一

1C06 メリライト中のイオンの拡散(東大 RI セ・筑波大地球科学*・学習院大理**) ○森岡正名・八木尚義*・長沢 宏**

1C07 The host phase of nitrogen in ordinary chondrites. (東大理) ○橋爪 光・杉浦直治

1C08 Y-74191 (L3) 隕石中の重いチッソ(東大理) 杉浦直治・橋爪 光

1C09 Re-Os 年代測定法による鉄隕石、石鉄隕石の化学進化(地調・東大理*) 平田岳史・○増田彰正*

一般講演[地球外物質]

(13:15~14:15) 座長 清水 洋

1C10 希ガスのグロー放電インプランテーション実験(神戸大理) ○松田准一・前川竜男

1C11 衝撃合成ダイヤモンド中の希ガス(II)(神戸大理・東北大金研) ○久住晶子・松田准一・草場啓治・庄野安彦

1C12 Canyon Diablo 鉄隕石の酸不溶性残渣中の希ガスについて(神戸大理・東大教養) ○小方 靖・松田准一・宮本正道

1C13 アルカリ金属とカンラン石組成の相関をもつ Allende (CV3) コンドルール(神戸大理) ○中村 昇・松田 均・島岡太郎・横山菜香・安部 毅・下田 玄・山本綱志

(14:30~15:30) 座長 福岡孝昭

1C14 Murchison (CM2) 隕石を用いたアルカリ金属の蒸発実験(神戸大理) ○宮野伸夫・中村 昇・島岡太郎・馬場敏幸・山本綱志

1C15 コンドライト物質を用いたアルカリ金属の蒸発実験(VI)(神戸大理) ○島岡太郎・中村 昇

1C16 隕石中の希土類元素および Y の分布(II)(日大文理) ○米田成一・岩岡博幸・篠塚一典・永井尚生・本田雅健

1C17 Allende コンドライトの Mg 同位体組成(東大宇宙線研・神戸大理) ○三澤啓司・中村 昇

1C18 ダイヤモンド、グラファイトの光学的性質からみたユレイライト母天体の不均一性(東大理・理研) ○鍵 裕之・高橋和也・増田彰正

(15:45~16:45) 座長 下山 晃

1C19 非南極産普通コンドライトの希ガス分析と⁸¹Kr の検出(岡山大地球研) ○長尾敬介・中村弥生・尾形亜津美

1C20 南極ユークライトの⁸¹Kr-Kr 法による落下年代(岡山大地球研) ○中村弥生・尾形亜津美・長尾敬介

1C21 南極やまと月隕石の化学(学習院大理・Battelle・Oregon State Univ) ○福岡孝昭・J. C. Laul・R. A. Schmitt

1C22 外惑星の氷、二酸化炭素を用いた ESR 年代測定的基础研究(阪大理) 塚本義朗・○豊田 新・山中千博・池谷元伺

1C23 南極産オーディナリー・コンドライトの化学組成(都立大理) ○尾崎大真・海老原亮・中原弘道

D会場

一般講演[海洋]

(9:30~10:45) 座長 渡辺修一

1D01 日本海海底における有機態炭素の続成とその水平的遷移(東海大海洋) ○加藤義久・岡部史郎

1D02 中止

1D03 高緯度海域における沈降粒子中の炭化水素組成について(名大水圏研) ○生田直子・半田暢彦

1D04 外洋表層水における懸濁態有機炭素・窒素安定同位体比の変動特性(名大水圏研) ○中塚 武・半田暢彦

1D05 太平洋赤道域海水の溶存有機炭素・窒素(気象研地球化学) 鈴木 款・高谷祐吉・○杉村行勇

(11:00~12:00) 座長 鈴木 款

1D06 北太平洋西部海域における懸濁態アミノ酸の鉛直分布(香川大農) 門谷 茂・○三島康史・吉田光善・岡市友利

1D07 ベンガル湾のセジメント・トラップのアミノ酸について(東大海洋研・ハンブルク大*) ○石塚明男・Venu Ittekkot*

1D08 浜名湖過去8000年における有機態炭素および金属元素の変動(東海大海洋・静岡大理*) 加藤義久・○南 秀樹・和田秀樹*

1D09 鯨類の骨-体内水-海水の間の酸素同位体分別(富山大理) ○渋谷 敏・吉田尚弘

(13:15~14:30) 座長 早瀬光司

1D10 秋吉石灰岩のストロンチウム同位体比(筑波大地球科学) ○西岡澄濃・荒川洋二・小林洋二

1D11 世界の主要な海域におけるカルシウムとアルカリ度の分布について(北大水産) 渡辺修一・○小林基秀・角皆静男

1D12 沈降粒子中の Fe と Mn の存在状態-沿岸と外洋との比較- (北大水産) 乗木新一郎・○横溝穂高・角皆静男

1D13 沿岸海洋におけるセレンの除掃過程に関する研究(近畿大理工・和歌山県水試*・東京水産大**) ○中口 譲・小池祐一・北内佳弘・竹内照文*・石丸 隆**

1D14 海水等の天然水中のマンガンの挙動に関する研究(近畿大理工・近畿大理工総研*) ○青野辰雄・中 勤・村上和広・藤野 治*・中口 譲・平木敬三

(14:45~16:00) 座長 石塚明男

1D15 堆積物表層におけるマンガンの酸化状態の変化

- と遷移元素の循環（東海大海洋）加藤義久・
○棚瀬ますみ・岡部史郎
- 1D16 白鳳丸世界一周航海における海洋表層のアルミ
ニウム（広島大・神船大*）○竹内和久・坪田
博行・三宅 寛*
- 1D17 東シナ海における重金属元素の分布と挙動（広
島大）○下島公紀・坪田博行
- 1D18 日本海溝斜面部で捕捉した沈降粒子中の陸源成
分の季節変動（北大水産）○乗木新一郎・斉藤
良介・横溝穂高・斉藤千鶴・角皆静男
- 1D19 沖縄舟状海盆と四国海盆における沈降粒子中の
陸源成分の起源（北大水産）○斉藤千鶴・乗木
新一郎・角皆静男
- （16：15～17：30）座長 加藤義久
- 1D20 ^{227}Ac の海洋地球化学（東大海洋研・日大文理）
○野崎義行・山田正俊・二階堂裕文
- 1D21 ホタテガイと周辺の水溶液中溶存炭酸の $\Delta^{14}\text{C}$ 間
の不一致（北大水産）渡辺修一・○都築 学・
角皆静男
- 1D22 クーロメータを用いた海水中溶存無機炭素の定
量（北大水産）渡辺修一・○小埜恒夫・小林基
秀・角皆静男
- 1D23 太陽光の影響による瀬戸内海海水中での
 H_2O_2 の生成（広島大総科）○早瀬光司・後田
俊直・山口俊哉・藤原祺多夫・坪田博行
- 1D24 中部熱帯太平洋で観測された表面海水中の
 pCO_2 （気象研地球化学）○井上久幸・石井雅
男・杉村行勇

第2日 10月4日

A 会場

課題講演（水系の物質移動）

コンビナー 水谷義彦・佐藤 修

（9：00～）

- 2A01 地すべり地粘土の移動に關与する地下水の水質
（新潟大災害研）○佐藤 修
- 2A02 琉球石灰岩地域における地下水を通しての物質
移動（琉球大理）○渡久山章・仲間 靖
- 2A03 河川の流下にもなう化学成分濃度変化とその
特徴—弘前市棚内川の例—（弘前大理）○山口
学・中谷 周
- 2A04 沢水における底質へのBr-吸着にはたす有機物
質の役割（東工大総合理工）○鶴見 実
- 2A05 地熱熱水におけるゲルマニウムの挙動（九大
教養）○野田香織・横山拓史
- 2A06 草津白根山火口湖湯釜水中の硫酸イオンの化
学的・同位体的挙動（東大教養・岡山大地球

- 研*）○大沢信二・日下部実*，千葉 仁*・松
萩邦彦・高野穆一郎
- 2A07 大気—海洋間のメタンガス交換（名大水圏研・
国立環境研*・東大理**）○松浦 宏・松本英
二・野尻幸宏*・石橋純一郎**

一般講演 [大気・降水]

（13：00～14：00）座長 福岡紀夫

- 2A08 大気中の超微量成分としての気体状あるいは微
粒子状金属化合物の濃縮捕集法（近畿大理工・
和泉市役所*）○小松 圭・森田道隆・藤原一
也*・中口 誠・平木敬三
- 2A09 大気中に存在する個々の粒子の粒径と元素分析
による挙動解析の試み（北海道東海大工）○植
松光夫
- 2A10 水田からのメタン発生量の時間および空間的な
変動について（農環研）○八木一行・陽 捷行
- 2A11 半導体レーザーによる遠隔メタン検出（東京カ
ス技研・慶応大理工*）○田井秀男・田中弘明・
上原喜代治*

（14：00～14：45）座長 植松光夫

- 2A12 ヨウ素の水田からの揮散（放医研）○村松康行・
吉田 聡
- 2A13 吸着濃縮／キャピラリー GC/MS による大気
中ジメチルスルフィドの測定（国立公害研）
○横内陽子
- 2A14 液体シンチレーションカウンターによるラドン
逸散率の測定（都立大理・山梨医科大・北里環
境科学セ）○堀内公子・石井 忠・村上悠紀

B 会場

課題講演（炭酸塩の地球化学）

コンビナー 一國雅巳・澤田 清

（9：00～）座長 吉岡小夜子・渡久山章

- 2B01 炭酸カルシウムへのイオンの吸着（新潟大理）
○澤田 清・鈴木俊雄
- 2B02 炭酸カルシウムによるフッ化物イオンの取りこ
み：マンガンによる置換の効果（東工大総合理
工）○一國雅巳
- 2B03 炭酸カルシウムの結晶形に対する硫黄塩と塩化
物の効果（琉球大理）○渡久山章・比嘉清喜・
那須浩二・伊集守道・中宗根薫
- 2B04 炭酸殻生成におけるマンガンの挙動（愛知教
大・都立科技大）○吉岡小夜子・寺井 稔
- （10：20～）
- 2B05 アブダビ産ウーライトの化学組成（群馬大工）
○相沢省一・赤岩英夫

- 2B06 石灰岩中のマグネシウム，ストロンチウムおよ
びバリウムの存在状態（甲南大理・阪府公衛
研*・阪府大付属研**）日下 譲・○宮本和法・
玉利祐三・辻 治雄・藤原儀直・大森佐与子*・
溝畑 朗**
- 2B07 西秋吉台鍾乳石（石筍）の微量元素存在度（海
技大教養・姫路工大理*・京大原子炉**）○藤
谷達也・森永速男*・高田実弥**

総合討論

課題講演（炭酸塩の地球化学）

（13：00～）座長 吉村和久・大隈多加志

- 2B08 金浦温泉から析出した炭酸塩沈殿物（東北大教
養）○鈴木励子
- 2B09 最終氷期における大気 CO_2 濃度の変動に対す
るサンゴの役割（名大水圏研）○加藤喜久雄
- 2B10 海底からのメタンの湧出と炭酸塩殻の形成—カ
ナダ，バフィン島沖の例（東大理）○松本 良
- （14：10～）
- 2B11 秋吉台カルストの地下水の地球化学的・水文学
的研究（九大教養・九大農*）○吉村和久・井
倉洋二*・
- 2B12 南海トラフ冷却ベントに伴う炭酸塩クラスト
（東大海洋研・エコール ノルマル シュプレー
ム）○酒井 均・小林和男・X. Lepichon・
日仏 KAIKO-NANKAI 計画参加者
- 2B13 常温・高圧における液体 CO_2 ・水系の実験的
研究（電中研）○大隈多加志・仲敷憲和

総合討論

C 会場

課題講演（放射性同位元素の地球化学）

コンビナー 角皆静男・橋本哲夫

（9：00～）座長 中西 孝

- 2C01 降水中の $\text{Pb}-210$ ， $\text{Bi}-210$ ， $\text{Po}-210$ （北大
水産）原田 晃・○時枝隆之・成田尚史・角皆
静男
- 2C02 筑波における人工放射性核種の降下量について
（気象研・長崎海台*）○廣瀬勝己・高谷祐吉・
野木義史・杉村行勇・青山道夫*
- 2C03 地表大気の $\text{Kr}-85$ 濃度の経年変化（気象研地
球化学）鈴木 款・○杉村行勇
- 2C04 小河川流域での原子力施設起源のトリチウムの
挙動解析（放医研・環境衛生）○宮本霧子・井
上義和・福島和子・岩倉哲男
- （10：30～）座長 廣瀬勝己
- 2C05 新潟市における大気，降水，河川水，水道水中

のトリチウム濃度（新潟県衛生公害研）殿内重
政・○安達 恵

- 2C06 黄海，東シナ海表層水中の ^{210}Pb ， ^{210}Po とRa
同位体の挙動の比較（東大海洋研・広島大総
合*・日大文理**）○野崎義行・V. Kasemsu-
papy*・坪田博行*・八島真由美**・生田直
子**
- 2C07 海洋水中を沈降する天然放射性核種（北大水産）
角皆静男・原田 晃・田口和典・成田尚史・楯
和久
- 2C08 海洋堆積物中の天然放射性核種（北大水産）
○成田尚史・原田 晃・角皆静男

課題講演（放射性同位元素の地球化学）

（13：00～）座長 野崎義行

- 2C09 石炭からダイヤモンド生成の可能性：カルボナ
ドの起源（東大理・立教大原研*）○小嶋 稔・
座主繁男・戸村健児*
- 2C10 オクロ天然原子炉における核分裂起源核種の挙
動（東大理）○日高 洋・増田彰正
- 2C11 風化残留鉱床等におけるウラン核種の挙動（地
調）○金井 豊・神谷雅晴・坂巻幸雄
- 2C12 東濃ウラン鉱床地帯の地下水および地表水中の
ウラン同位体（金沢大理・動燃中部*）○中西 孝・
浜 克宏・山川 稔*・落合洋治*・瀬尾俊弘*
- （14：20～）座長 角皆静男
- 2C13 Nevado del Ruiz 火山1985年噴出物のU—Io
年代（学習院大理）○福岡孝昭
- 2C14 液シン法を用いた玉川温泉水のTh系列核種の
非平衡観測について（新潟大理）橋本哲夫・
○野口雅美・鷲尾秀樹・久保田知明
- 2C15 加速器による名古屋大学内の松葉の ^{14}C 濃度測
定（名大年代測定セ・名大理*）○中村俊夫・
中井信之*・古川路明*

D 会場

一般講演 [有機物・生物]

（9：00～10：00）座長 西村弥重

- 2D01 火山岩貯留炭化水素の有機地球化学 I. バイオ
マーカー組成から推定される石油炭化水素の起
源（地調）○坂田 将
- 2D02 鉱物による軽質炭化水素の分別の実験的考察
（地調）○猪狩俊一郎・坂田 将
- 2D03 含窒素多環芳香族化合物（アザアレーン）の統
成変化（地調）○山本正伸
- 2D04 新庄盆地新第三紀の堆積岩中の低級ジカルボン
酸（筑波大化）○重松隆助・下山 晃・原田 馨

- (10:15~11:15) 座長 寺島美南子
- 2D05 熱水条件下における堆積有機物の化学変化 I
予報 (都立大理) ○小林俊一・石渡良志
- 2D06 ヤングケロジェンの熱変化の化学(3) 窒素化合物 (都立大理・石油公団石技セ*) ○石渡良志・菅原 智・町原 勉*
- 2D07 各種湖沼堆積物中の脂質成分の比較 (都立大理)
○上村 仁・清水賢 一・福島和夫・石渡良志
- 2D08 榛名湖周辺土壌の有機物組成 I 脂質 (都立大理) ○清水賢一・石渡良志
- (11:15~12:00) 座長 坂田 将
- 2D09 沿岸堆積物中の脂質成分の分布について 3.
千々石湾, 富江湾 (長崎大教育・都立大理・創価大教育) ○近藤 寛・石渡良志・山本修一
- 2D10 現世堆積物中における Non-Solvent Extractable 脂質の起源及び地球化学的特性—ブラジル リオ・ドッセ湖沼群の表層堆積物中の脂肪酸 (愛知学院大・大阪教育大・愛知大・北方電力・ミナス ジェライス大・サンパウロ大) ○西村弥亜・三田村緒佐武・西条八束・K. Hino・F. A. R. Barbosa・J. G. Tundisi
- 2D11 手賀沼の底質に含まれる有機物について (地調) ○寺島美南子・井内美郎・寺島 滋
- 一般講演 [有機物・生物]
- (13:00~14:15) 座長 立川 涼
- 2D12 浮遊性有孔虫殻アミノ酸のラセミ化反応による海底堆積物の年代測定について (名大水圏研) ○原田尚美・半田暢彦
- 2D13 日本海溝セジメントトラップ試料の Py-GC-MS による解析 (II) (創価大教育・都立大理・名大水圏研) ○山本修一・石渡良志・半田暢彦
- 2D14 堆積物表層部分からの有機態金属化合物の溶出挙動に関する研究 (近畿大理工) ○中 勤・中口 譲・青野辰雄・平木敬三
- 2D15 現世堆積物における有機硫酸黄化合物の生成 (都立大理) 福島和夫・安川正子・無藤直子・石渡良志
- 2D16 新潟県における環境中のベンゾ [a] ピレンとベリレンの分布 (新潟衛生公害研) ○川田邦明・森山 登・横山ひろみ・藤枝義丸
- (14:15~15:30) 座長 石渡良志
- 2D17 東京湾岸に着生するムラサキイガイ中の有機スズ濃度とその代謝物に関する研究 (国立環境研・東京水産大*) ○白石寛明・東山拓雄*・大槻晃*
- 2D18 熱帯地域における湖沼, 水田から発生するメタ

- ンの炭素同位体組成 (三菱化成生命研・フィニガンマツト*・日大農獣医**・名大農***) 杉本敦子・徐 紅*・片瀬隆雄**・木村真人***・和田英太郎
- 2D19 限外濾過法による沿岸海水中の溶存有機物 (7 ミノ酸, 炭水化物) の分子量分画法の検討 (東工大農) ○小川浩史・小倉紀雄
- 2D20 炭化水素の無機酸化に伴う炭素同位体効果 (名大理・カルガリー大) ○清棲保弘・H. R. Krouse
- 2D21 熱帯における化学物質の使用とその地球汚染への影響 (愛媛大農・愛媛大連合農学*) ○立川涼・田辺信介・A. Ramesh*・岩田久人

第3日 (10月5日)

A 会場

一般講演 [火山]

(9:00~10:00) 座長 水谷義彦

- 3A01 レーザー加熱+GCMS 法によるガラス包有物中の H₂O および CO₂ の分析 (岡山大地球研) ○斎藤元治・日下部実・河野美香
- 3A02 火山岩中の角閃石の水素同位体比, 日本の 2, 3 の第四紀火山について (秋田大鉱山) ○宮城磯治・松葉谷治
- 3A03 一ノ目潟, 隠岐島後マントルゼノリスの希ガス同位体組成 (岡山大地球研・東工大理*) ○長尾敬介・高橋栄一*
- 3A04 若い火山岩の K-Ar 年代測定 (岡山大地球研・神戸大理*) ○尾形亜津美・長尾敬介・秋本俊一・松田准一*

(10:00~11:15) 座長 高野穆一郎

- 3A05 松川地熱地域におけるメタンの起源 (名大理・日重化) 清棲保弘・吉田 裕
- 3A06 立山地獄の噴気の同位体比 (富山大理) ○水谷義彦・佐々木康雄
- 3A07 箱根火山とヘリウム同位体比 (東大理) ○坂本稔・佐野有司・脇田 宏
- 3A08 火山性温泉水の ⁴⁰Ar/Cl 比 (東工大草津白根火山観測所) ○大場 武
- 3A09 低温噴気孔におけるガス測定 (武蔵高校) ○高江州瑩

一般講演 [有機物・生物]

(13:15~14:00) 座長 佐野有司

- 3A10 陽子線照射による原始地球及び地球圏外環境下での生体有機化合物の生成 (横浜国大工・東大宇宙線研*・東工大生命理工**) ○小林憲正・

- 斎藤 威*・金子竹男・土屋正彦・大島泰郎**
- 3A11 天然水中におけるセレンの存在状態に及ぼす水棲微生物及び堆積物の影響 (近畿大理工) ○小池祐一・中口 譲・青野辰雄・平木敬三
- 3A12 湯釜湖水および周辺の硫黄化合物の循環に対する硫黄バクテリアの寄与 (東大教養・東邦大医) 越田正樹・大沢信二・杉森賢司・高柳進之輔・綿祓邦彦・高野穆一郎
- (14:00~14:45) 座長 清棲保弘
- 3A13 南極の岩石内微生物群の化石化にともなう有機成分の変化 (東大教養・Florida State Univ*) ○松本源喜・E. I. Friedmann*・綿祓邦彦
- 3A14 生態系変動の指標としての動物骨コラーゲンの $\delta^{13}\text{C}$, $\delta^{15}\text{N}$ 分析 (三菱化成生命研) ○南川雅男・江川早穂
- 3A15 野性植物の ^{13}C , ^{15}N 分布とその時代変化 (三菱化成生命研・名大農*) ○南川雅男・笹川英夫*・江川早穂・杉山達夫*

B 会場

一般講演 [岩石・地殻]

(9:00~10:00) 座長 川辺岩夫

- 3B01 南西諸島産リン鉱石中のウラン, トリウム及び REE について (琉球大理) ○棚原 朗・平良初男・金城英和
- 3B02 ジルコン中の Hf および Zr I. Hf/Zr 比と結晶-メルト間の分配係数 (学習院大理) ○福岡孝昭・鈴木香織・長沢 宏
- 3B03 ジルコン中の Hf および Zr II. Hf と Zr の相互拡散 (学習院大理) ○鈴木香織・長沢 宏
- 3B04 Megacryst と host basalt の REE 濃度にもとづく REE の配分, イオン半径, 及び化学組成の関係の再検討 (東大理) ○劉 叢強・増田彰正・清水 洋

(10:00~11:15) 座長 海老原充

- 3B05 酸成溶液による岩石の溶出変化 (東邦大理) ○吉池雄蔵・岡村 忍・大森禎子・岩崎岩次
- 3B06 Sino-Korean platform の先カンブリア紀変成岩類の希土類元素の存在度と Sr, Nd 同位体比 (東大理) ○季 承求・清水 洋・増田彰正
- 3B07 東部トルコ, プレート衝突境界に産する火山岩の起源 (東大理・神戸大理*・トルコ MTA**) ○野津憲治・宇井忠英*・松田准一*・Tuncay Ercan**
- 3B08 16GPa, 2000°C における珪酸塩鉱物-融液間の微量元素の分配 (愛媛大理・東北大大理*)

- 森山純子・川辺岩夫・大谷英治*・藤野清志
- 3B09 ランタニド収縮とランタニド・テトラド効果 (愛媛大理) ○川辺岩夫

一般講演 [岩石・地殻]

(13:15~14:15) 座長 野津憲治

- 3B10 カナダ・ケベック州, ラブリェヴィル斜長岩体の地球化学 (都立大理・東大理*) 海老原充・脇田 宏*
- 3B11 天然ガラス中の Ne 濃縮についての室内実験 (神戸大自然科学) ○松原佳代・松田准一
- 3B12 近畿地方に分布する泥質堆積岩の酸素・水素同位体比について (大阪市大理・岡山大地球研・東大海洋研) ○益田晴恵・日下部実・酒井 均
- 3B13 中央構造線の断層粘土の酸素, 水素同位体比 (富山大理・地調*) ○佐竹 洋・島倉俊輔・柴田 賢*

(14:15~15:15) 座長 佐竹 洋

- 3B14 東アフリカの土壌リン酸塩の酸素同位体組成 (岩手大農・富山大理) ○溝田智俊・土門由美・吉田尚弘
- 3B15 カナダ楯状地の花崗岩の Ce, Nd 同位体比 (東大理) ○天川裕史・清水 洋・増田彰正
- 3B16 極微弱瞬間分光システムを用いた天然石英および合成ガラスからの熱蛍光観測 (新潟大理) 橋本哲夫・○坂井 正・坂上修栄
- 3B17 石英粒子による旧石器関連地層の熱蛍光年代測定 (新潟大理) 橋本哲夫・○小嶋素志・白井更知

C 会場

一般講演 [堆積物]

(9:00~10:15) 座長 寺島 滋

- 3C01 炭酸カルシウムの結晶化における界面活性剤の影響 (大阪府立工専) ○伊藤和男・射場邦栄
- 3C02 ODP Leg127 日本海深海掘削の Site795 コアの微量元素組成 (名大水圏・京大原子炉) ○増澤敏行・高田実弥・松下録治
- 3C03 ODP Leg127 日本海深海掘削の Site795 コアの野イチゴ状黄鉄鉱の硫黄同位体比 (名大水圏研・岡山大地球研) ○増澤敏行・日下部実
- 3C04 西部オーストラリアの始生代に産する珪質・鉄質堆積物の化学組成 I (名大理) ○杉谷健一郎・堀内佳邦・杉崎隆一・足立 守
- 3C05 西部オーストラリアの始生代に産する珪質・鉄質堆積物の化学組成 II (名大理) ○堀内佳邦・杉谷健一郎・杉崎隆一・足立 守

- (10:15~11:00) 座長 増澤敏行
- 3C06 堆積物コア有機物の¹³C, C/N 比及び加速器¹⁴C年代からみた Holocene の環境変化 (名大理)・名大年代セ*) ○中井信之・太田友子・森 育子・中村俊夫*
- 3C07 東京湾堆積物の有機物の鉛直変化 (名大水圏研) ○野田慎二・松本英二
- 3C08 サンゴ礁, イノー内への土砂流入 (琉球大理・八重山高校*) ○平良直秀・東田盛善*・渡久山章

一般講演 [堆積物]

- (13:15~14:15) 座長 長尾敬介
- 3C09 底質の粒度組成と堆積過程 (横浜市公害研) ○白柳康夫・大矢正代
- 3C10 海底堆積物中の白金及びパラジウム含有量と堆積環境 (地調) ○寺島 滋・中尾征三・三田直樹・西村 昭
- 3C11 四万十帯層状チャートの希土類元素組成からみた堆積環境 (神戸大理) ○山本鋼志
- 3C12 新潟地域における堆積物中の硫黄・炭素・窒素含有量と堆積環境 (地調) ○粕 武・鈴木尉元

D 会場

一般講演 [陸水]

- (9:00~9:45) 座長 野尻幸宏
- 3D01 湖底堆積物直上水中における脱窒過程, 室内実験を中心に (愛知学院大教養) ○小山忠四郎
- 3D02 地下水 N₂O の窒素・酸素安定同位体組成 (農工大農・三菱化成生命研*・Mar. Biol. Lab.**・NYS Dept. of Health***) ○上田真吾・小倉紀雄・和田英太郎*・Brian Fry**・吉成 正***
- 3D03 富士山麓の河川水, 湧水及び地下水の同位体組成とその由来 (名大理) ○菊田直子・篠原智子・中村信之
- (9:45~10:30) 座長 相沢省一
- 3D04 相模野段丘の地下水の水質 (神奈川県温泉地学研・相模原市環境部) ○石坂信之・鈴木正美
- 3D05 埼玉県内の河川の溶存成分濃度について (埼玉大工) 君島克憲・奥墨 勇・○畑中一裕・金城光宏・小澤竹二郎・坂本和彦・奥山正喜
- 3D06 (中止)

一般講演 [陸水]

- (13:15~14:30) 座長 小澤竹二郎
- 3D07 (中止)
- 3D08 白根硫黄鉱山鉱泉水の遅沢川水系河川に与える

- 影響 (上智大理工) ○山崎智廣・大井隆夫・小坂知子・垣花秀武
- 3D09 陸水域における溶存メタンの分布と変動 (国立環境研・東大理*・東京水産大**) ○野尻幸宏・石橋純一郎*・中村岳史**・大槻 晃**
- 3D10 土壌へのヨウ素 (I⁻ と IO₃⁻) の吸着 (放医研) ○吉田 聡・村松康行・内田滋夫
- 3D11 砂漠における塩類の析出及び集積 (理研) 岡田昭彦・○矢吹貞代・矢吹英雄

P 会場

ポスターセッション

- (11:00~12:00)
- 3P01 ESR (電子スピン共鳴) による火山岩の年代測定 (阪大理) ○豊田 新・池谷元司
- 3P02 水晶薄片の不純物と熱蛍光現象について (新潟大理) ○橋本哲夫・小嶋素志・坂上修栄・坂井 正
- 3P03 西日本内帯の白亜紀酸性岩類の Rb-Sr 年代測定 (神戸大教養・京都産業大教養) ○寺門靖高・能田 成
- 3P04 地震予知のための温泉ガス連続自動観測 (名大理) ○永峰康一郎・杉崎隆一
- 3P05 中部沖縄トラフ海底熱水系における海水と熱水の混合の化学的モデル (岡山地球研・東大海洋研*・東大理**・琉球大理***) ○千葉 仁・酒井 均*・蒲生俊敬*・石橋純一郎**・下島公紀*・金 銀洙*・大森 保***
- 3P06 流紋岩-熱水溶液間での希土類元素および Ba の移動に関する実験的研究 (神戸大教養・海大・京大原子炉) ○寺門靖高・藤谷達也・高田実弥
- 3P07 海水と 250, 300°C, 飽和蒸気圧条件で反応させた玄武岩質ガラス表面の変質 (東大海洋研・地調*) ○柳沢文孝・酒井 均・青木正博*・松本幸敬*
- 3P08 日本の地熱流体の化学種組成と化学平衡 (岡山地球研) ○千葉 仁
- 3P09 鉄モンモリロナイトと火星土壌の吸収および反射スペクトルの類似性 (大阪府立工専) ○藤和男・島田勝久
- 3P10 南海トラフ付加帯隙水の地球化学: ODP Leg 131 報告 (東大海洋研・SIO*) 蒲生俊敬・J. Gieskes*・M. Kastner*・Leg131 乗船研究者一同
- 3P11 北部北太平洋における重金属元素の分布と挙動 (広島大) ○下島公紀・坪田博行

- 3P12 カナダ, ニューファウンドランド島より, 石炭紀熱水 (?) 噴出孔生物群集の発見 (東大理・Dalhousie Univ・ROM) ○松本 良・P. E. Schenk・P. von Bitter
- 3P13 有珠山における火山ガスと火山岩の間のヒ素とリンの分配 (東工大理・電通大自然科学*) ○マンボ V. S.・吉田 稔・松尾禎士*
- 3P14 化石の AMS¹⁴C 年代測定と安定同位体比による古環境変遷の研究 (名大理・名大年代セ*) ○有田陽子・中井信之・中村俊夫*
- 3P15 水-岩石・鉱物・ガラス・セラミックス反応に関する文献データベース (東大海洋研・地調*) ○柳沢文孝・松沢幸敬*・青木正博*
- 3P16 洞窟鉱物生成に果たすコウモリグアノの役割 (九大教養・広島大総合科学・産業医大医療短大) ○吉村和久・浦田健作・染谷 孝
- 3P17 新潟県における Sn, Se 及び Mo の分布と胆道がんとの関係 (新潟大工・新潟大医*) ○加藤皓一・中平浩人*
- 3P18 ラドン観測による地震前兆現象の捕捉 (東大理) ○脇田 宏・五十嵐丈二・野津憲治
- 3P19 黄砂エアロゾルの化学組成と降下量 (国立環境研・名大水圏研*) ○西川雅高・金森 悟*・金森暢子*
- 3P20 沖縄トラフ海底熱水性堆積物の化学組成と同位体組成 (琉球大理) ○大森 保・大城 学・才賀義寛・棚原 朗・平良初男
- 3P21 カルサイトの結晶成長機構について (琉球大理) 大森 保・○王奇 偉
- 3P22 マグネシアンカルサイト形成に与えるリン酸化合物の効果 (琉球大理) ○大森 保

1990年度 日本地球化学総会報告

10月4日 17時から17時40分まで, 東京大学教養学部において行われた。総会次第は次の通りである。なお1988年度決算報告, 1989年度会計中間報告, 1990年度予算についてはニュース119号 p. 10~12に掲載済みである。

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶
4. 年会実行委員長挨拶
5. 1988年度事業報告ならびに決算報告
6. 監査報告
7. 1989年度事業中間報告ならびに会計中間報告
8. 1990年度事業計画ならびに予算案
9. 1990-1991年度役員選挙結果報告

10. その他
11. 1989年度奨励賞の授与
12. 閉会

1988年度事業報告

1. 会員状況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1988年1月1日	886	12	6	904
入 会	31	0	0	31
退 会	18	0	0	18
1988年12月31日	899	12	6	917

2. 年会, 委員会等開催数

年会1回 (10/12-14: 広島大学), 総会1回 (10/13: 広島大学), 評議員会3回 (2/13, 6/4, 10/11), 幹事会3回, 会誌編集委員会4回, ニュース発行委員会3回, 行事委員会3回, IGBP 委員会1回, 春季シンポジウム1回, 学会賞受賞者選考委員会1回

3. 会誌発行

G. J. Vol. 22(1-6), 地球化学 Vol. 22 (1, 2)

4. ニュース発行

Nos. 113, 114, 115

5. 学会賞等の授与 (奨励賞)

6. 学会共催等

第25回理工学における同位元素研究発表会

日本宇宙生物学会第二回大会

ESR 応用計測研究会研究発表会

1989年度事業中間報告

1. 会員状況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1989年1月1日	899	12	6	917
入 会	13	1	0	14
退 会	28	1	1	30
1989年8月31日	884	12	5	901

2. 年会, 委員会等開催数

年会1回 (10/3-5: 東京), 総会1回 (10/4: 東京), 評議員会3回 (2/18, 6/4, 10/2), 幹事会3回 (2/8, 5/28, 9/30, 東京), 会誌編集委員会4回, ニュース発行委員会3回, 行事委員会3回, 学会賞受賞者選考委員会1回, 春季シンポジウム1回, 選挙管理委員会2回

3. 会誌発行

G. J. Vol. 23(1), 地球化学 Vol. 23(1)

4. ニュース発行

Nos. 116, 117, 118

5. 名簿の発行

6. 1990-1991年度役員選挙実施

7. 学会賞等の授与(奨励賞二件)
8. 学会共催等
 - 第26回理工学における同位元素研究発表会
 - ESR 応用計測研究会研究発表会
 - 日本宇宙生物学会第三回大会
- 1990年度事業計画
 1. 年会1回(新潟)
 2. 総会1回(新潟)
 3. 春季シンポジウム(合同)(東京)
 4. 評議委員会3回
 5. 幹事会3回
 6. 会誌発行
 - G. J. Vol. 24 (1-6)
 - 地球化学 Vol. 24 (1, 2)
 7. ニュース発行
 - Nos. 120, 121, 122, 123
 8. 学会賞等受賞者の選考
 9. 学会共催等
 - 第27回理工学における同位元素研究発表会(共催)
 - 国際地球物理金沢会議(AGU等と共催)
 - 国際腐植物質学会第5回国際会議(協賛)
 10. その他

日本地球化学会 1990 年度 第 1 回評議員会議事録

- 日 時: 1990年2月17日15:00-19:00
場 所: 東京大学教養学部
- 出席者: 綿坂邦彦会長, 脇田宏副会長, 海老原充, 小倉紀雄, 金森 悟, 北 逸郎, 佐野有司, 清水洋, 下山 晃, 鈴木俊雄, 高岡宣雄, 高野穆一郎, 角皆静男, 長尾敬介, 野津憲治, 藤原祺多夫, 松田准一, 松久幸敬, 柳 哮 各評議員
1. 会長は, 評議員会の議をへて, 鈴木俊雄, 松久幸敬の両氏に評議員を委嘱した。
 2. 前回議事録を一カ所修正の上, 了承した。
 3. 報告事項
 - 3-1 庶務(野津評議員)

日本宇宙生物学会第4回大会, 「地球気候における南極永床の役割」シンポジウム, 2件の共催依頼に対して, 共催を承諾した。笹川科学研究奨励助成, 「しんかい2000」共同利用, 2件の募集書類が学会にきた。北野康著「炭酸塩堆積物の地球化学」(東海大学出版会)の献本があった。
 - 3-2 幹事会(野津評議員)

2月10日東京大学理学部において幹事会を行った。出席者は, 綿坂会長, 脇田副会長, 海老原, 清水, 高野, 野津, 各幹事で, 第1回評議員会の議題内容について議

- 論した。
- 3-3 会計(野津評議員)

1989年度の決算報告を作製中で, 海老原新会計との引継を行っている。
 - 3-4 編集
 - (1) Geochemical Journal(松久評議員)

Vol. 23は, No. 3 出版終了。No. 4 著者校正終了。No. 5 著者校ゲラ印刷中。No. 6 特集号編集作業中。1989年度中の投稿件数は57編, うち32編印刷済, 18編作業中, 7編却下。1990年度の投稿件数は2月9日現在4編, 他に特集号原稿8編。
 - (2) 地球化学(金森評議員)

石渡旧編集委員長との引継を2月17日に行った。Vol. 24分として4編引き継いだ。昨年の学会奨励賞受賞者に投稿依頼を行う予定である。
 - (3) ニュース(高野評議員)

No. 120は, 3月5日頃配布予定である。
 - 3-5 行 事
 - (1) 春季シンポジウム(清水評議員)

4月7日, 地球惑星科学関連5学会連合学会に参加する形で, 東京工業大学で行う。9:00-11:15一般講演8件, 11:30-12:30および15:45-17:45特別講演4件を予定している。連合学会全体のプログラムは, 3月中旬配布予定である。
 - (2) 1990年度新潟年会(鈴木評議員)

10月3日から5日新潟大学教養部で4会場を用いて行う。6月20日講演申し込み締切, 8月18日講演要旨締切の予定である。課題討論として「水系の物質移動」, 地圏における炭酸塩, 「放射性同位体を用いた地球化学」の3つを予定している。
 - (3) 1990年 WPGM 金沢会議(松久評議員ほか)

Volcanology, Geochemistry and Petrology (VGP) のセッションでは3つの特別セッションが行われる。参加登録の窓口は清水行事幹事が行うことになった。
 - 3-6 学術会議
 - (1) 地球化学宇宙化学研連(角皆評議員)

科学研究費の審査細目の見直しについて, 「物質循環」分科の新設を回答した。地球化学の振興に関して, 旧帝大系の学内改革で地球化学を確保するため, 学会との連携の必要性が議論された。
 - (2) 陸水研連(小倉評議員)

IAHS(国際水文科学連合)の1993年日本開催に際して日本地球化学会も共催団体となっており, 運営委員会委員を綿坂会長, 組織委員を小倉評議員として報告した。
 - (3) 鉱物研連(松久評議員)

大学における地球科学関係の組織替えの状況について

- 議論があった。
- (4) 海洋研連(角皆評議員)

JGOFs について議論があった。研究船の有効利用について見解をまとめている。
 - (5) 地質科学総合研連(脇田評議員)

科学研究費の審査細目の見直しで, 分析・地球化学を分析化学と地球化学に分割する提案をしたが, 研連からは出さないことになった。
 - (6) IGBP 拡大分科会(角皆評議員)

IGBP の7本目の柱として農学を加え, 4月を目標に勧告案を作製しつつある。
 - 3-7 その他
 - (1) 中井評議員から, 名古屋大学に年代測定研究センターが平成2年度に発足する旨, 文書で報告があった。
 4. 審議事項
 - 4-1 入退会承認

1998年11月1日から12月31日までの入会退会は, 以下の通り承認された。

入会(正会員5名): 棚原 朗, 熊谷 哲, 兵藤博信, 永野哲志, 新田恒造(学)

退会(正会員1名): 小山陸夫(逝去)

この結果, 会員数は以下になった。なお, 数年前から, 庶務がまとめて学会で報告する会員数と学会事務センターに登録されている会員数に2人の差があり, 両者をそろえるため, 今回の庶務の引継時に学会事務センター登録数を採用することとしたので, -2人の補正を行った。
- | | 正会員 | 賛助会員 | 名誉会員 | 計 |
|-------------|-----|------|------|-----|
| 1989年11月1日 | 889 | 12 | 5 | 906 |
| 入 会 | 5 | 0 | 0 | 5 |
| 退 会 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 補 正* | -2 | 0 | 0 | -2 |
| 1989年12月31日 | 891 | 12 | 5 | 908 |
- 学生43, 在外38を含む
- 4-2 長期会費滞納者, 住所不明者の取り扱い

1990年1月現在の会費納入状況について説明があった。2年から10年の会費滞納者の総計は99名(一般80名, 学生14名, 在外5名)で, 6年以上の滞納者に限っても35名(一般29名, 学生1名, 在外5名)であった。一般滞納者の中で, 24名は住所不明であり, 消息を知っている評議員は庶務に連絡先を知らせることとした。調査の結果, 不明の場合は, 除籍等の手続きになることが述べられた。また, 滞納者をなくす努力が足りないことが指摘された。
 - 4-3 学会賞等受賞者選考委員会の委員選出

- 経過説明, 意見交換のあと, 投票を行った。その結果, 松久(16票), 脇田(11), 増田(8) 酒井(6), 松尾(6)の各氏が選出され, この中で欠員が出た場合は次点の高岡氏(4票)が繰上がることとなった。委員長は, 選出された5名の中で, 評議員の松久または脇田氏があたることとなった。なお, 投票結果で12票の角皆氏は, 選考細則4を理由に委員を辞退した。
- 4-4 会員問題検討委員会の設置

脇田副会長より, 従来の会員管理のあり方の問題点が指摘され, 会員年齢構成の老齢化に伴い学会活力の低下が深刻化する前に, 若年会員の入会を奨励すべきことが述べられた。意見交換の後, 脇田副会長を委員長とする会員問題検討委員会を発足することとなった。当面, 半田, 長尾, 松田, 清水, 野津, 各評議員と野尻幸宏氏(国立公害研)があたることとした。
 - 4-5 名誉会員推薦に関する取り扱い

経過説明の後, 意見交換を行い, 評議員で名誉会員推薦を希望する場合は, 幹事会に対して申し出ることになった。
- ### 1990年度第2回評議員会議事録要旨
- 評議員会の議事録は, 従来, 評議員会の最初に前回評議員会議事録(案)を検討し, 必要があれば修正, 削除等を行い, 議事録として承認されている。承認された議事録がニュースに掲載されるが, 評議員会が年に3-4回しか開かれないため, 会員には半年位かそれ以上遅れて評議員会の内容が伝わるようになってしまっていた。このことは, 会員サービスの点でいかにも不親切であるとの意見が出され, 今回からは評議員会が開かれた直後のニュースに, 議事録要旨を幹事会の責任で掲載することになった。
- 1990年度第2回評議員会は, 6月23日15時より東京大学教養学部で開かれ, 出席者は綿坂会長を始め20名であった。以下に議事の概要をまとめる。正式の議事録は, 10月2日の次回評議員会で承認されたのち, ニュースに掲載の予定である。
1. 庶務, 編集, 行事に関する報告があった。平成2年度のGJに対する科研費による140万円の補助が内定した。春季シンポジウムは, 地球惑星科学関連学会1990年合同大会に参加する形で, 4月7日東京工業大学で行われ, 参加者100名余であった。1991年度の年会は愛媛大学で行われる。
 2. 今年度発足した会員問題検討委員会(脇田委員長)の第1回委員会では, 新会員勧誘の方策が話し合われた。年会の要旨集用紙発送の際, 入会申込書を同封する, 年会受付で入会勧誘を行う, 入会勧誘のポスター, 文書を作成し, 各種研究教育機関に配布することを当

面実施することとした。

3. 1990年1月1日から5月31日までの入会40名（正会員36名，賛助会員4名）退会16名（すべて正会員）が承認された。とくに学生の入会が20名と目だって多かった。この結果，会員数は5月31日現在，正会員911名（学生57名，在外36名を含む），賛助会員16名，名誉会員5名，合計932名となった。住所不明で，会費を長期に滞納している会員11名（国内8名，在外3名）を除籍することとした。

4. 1990年度会計決算報告案が提出され，審議の上，了承された。

5. 学会賞等受賞者選考委員会（脇田委員長）から1990年度の実績者の選考結果が報告され，以下の通り授賞を決定した。

日本地球化学会賞：角皆静男博士（北海道大学水産学部教授）

「大気－海洋系の地球化学的研究」

日本地球化学会奨励賞：篠原宏志博士（工業技術院地質調査所通産技官）

「マグマ－熱水体系の地球化学的研究」

日本地球化学会奨励賞：山本綱志博士（神戸大学理学部助手）

「地質時代と現世の珪質堆積物の生成環境：その対比における地球化学的解析」

6. 学会賞受賞者選考委員会から現在の選考方法を改善する必要があると，問題点が提起された。このため，脇田副会長を委員長とする授賞規定，受賞者選考細則見直し委員会を新たに設置することが了承された。

7. 地震学会，地球電磁気・地球惑星圏学会からよびかけのあった地球惑星科学関連学会1991年合同大会（1991年4月2日，共立女子大学・八王子キャンパスを予定）への参加を決定した。合同大会開催連絡委員会への対応は行事幹事の清水評議員があたることとした。

8. GJ論文の著作権が学会に帰属することを明示するため，投稿規定にこの旨書き加えること，著者との間で文書を交わすことが了承された。

新入会員紹介（1990年1月～5月）

入会（40名）

正会員（36名）

天野 光 日本原子力研究所環境安全研究部
一色 健司 高知女子大学家政学部生活理学科
牛木 久雄 理化学研究所地球科学研究室
小出 良幸 岡山大学地球内部研究センター
大貫 敏彦 日本原子力研究所環境安全研究部
田切美智雄 茨城大学理学部地球科学教室
小泉 尚嗣 京都大学防災研究所鳥取微小地震観測所

小松 善伸 水澤化学工業㈱研究開発部
佐藤 芳和 マクミランリサーチ研究所
斎藤 良介 ㈱海洋生物環境研究所
古山 勝彦 大阪市立大学理学部地球科学教室
諏訪 成雄 新潟県衛生公害研究所放射能科
中島 和夫 山形大学理学部地球科学教室
奈良岡 浩 筑波大学化学系
横内 陽子 国立公害研究所計測技術部
Miguel PARADA Dept. Geologia Geof.
sica, Univ. Chile

*坂本 稔 東京大学理学部地殻化学実験施設
*佐藤 努 東京大学理学部地殻化学実験施設
*渡辺 孝志 学習院大学
*川端 一史 北海道大学水産学部水産化学科
*小野寺 毅 北海道大学水産学部水産化学科
*時枝 隆之 北海道大学水産学部水産化学科
*皆川 昌幸 北海道大学水産学部水産化学科
*斎藤 千鶴 北海道大学水産学部水産化学科
*渡辺 豊 北海道大学水産学部水産化学科
*平田 岳史 東京大学理学部化学科
*鳥越 紀子 東京大学理学部地球物理学教室
*小林 貴之 東京都立大学理学部化学科
*鈴木 勝彦 東京大学理学部化学科
*宮島 利宏 京都大学理学部大津臨湖実験場
*萩谷 宏 東京大学理学部地質学教室
*尾崎 大真 東京都立大学理学部化学科
*能登 征美 岡山大学地球内部研究センター
*古宮 正利 筑波大学化学系
*黒木 紀子 東京学芸大学
*窪田 正和 九州大学理学部地球惑星科学科
（*：学生会員）

賛助会員（4名）

ドリコ株式会社（2口）
東京ガス株式会社企画部（5口）
東邦ガス株式会社企画部技術・調査G（1口）
㈱新潟県環境衛生研究部（1口）

1991年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者及び研究助成候補者の推薦依頼について

下記の推薦依頼が「女性科学者に明るい未来をの会」からありました。

記

猿橋賞

1. 本賞は自然科学の分野で，顕著な業績を収めた女性科学者（ただし，下記の推薦締切日で50才未満

に贈呈します。

2. 本賞は賞状とし，副賞として賞金（30万円）をそえます。
3. 本賞の贈呈は1年1件（1名）です。
4. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目，推薦理由（400字程度），略歴，主な業績文献リスト，及び，主な論文別刷10編程度をそえて，本会事務局までお送りください。
5. 締切は1990年11月末日（必着）。
6. 第11回の賞贈呈式は，1991年5月，東京において行う予定です。

研究助成金

1. 女性研究者で，海外のシンポジウム等に出席し，論文を発表する者に対して行われます。
2. 助成金は1件10万円とし，年に3件とします。
3. 所定の用紙に推薦対象者（各締切日において満40才未満）の略歴，研究業績，国際会議名（開催場所，年月日），発表論文題目，推薦理由等を記入して，本会事務局までお送りください。
4. 締切は1990年11月末日と，1991年4月末日の2回。
女性科学者に明るい未来をの会
〒166 東京都杉並区高円寺北 4-29-2-217
電話 03-330-2455

「朝日賞」推薦依頼について

朝日新聞社から1990年度朝日賞の受賞候補者の推薦依頼がありました。朝日賞は学術，芸術，科学技術，社会福祉，スポーツ，その他あらゆる分野の方々を選考対象としております。推薦票は本年9月5日必着で，お問い合わせなどは，下記へお願いします。

朝日新聞東京本社 企画第二部「朝日賞」係
〒104-11 東京都中央区築地5-3-2
電話 03-545-0131 内線5477

第5回化学情報講演会（通訳付）

主催 化学情報協会

日時 10月5日（金）13時から約3時間
会場 日仏会館ホール（東京都千代田区神田駿河台2-3，電話03-291-1143）

- 議題 1. 化学情報の新しい時代に対処するCASサービスの発表
Charles N. Costakos
CAS 営業・企画・渉外部

2. CAS化学物質登録システムの現状と将来
Ronald L. Wigington
CAS 所長，工学博士

参加 自由，無料

シンポジウム

「数値地図」－メッシュマップとその利用－

日時 1990年9月7日（金）10：00～17：00
場所 食糧会館・大会議室（千代田区麹町3-3-6）
TEL 03-222-9621
（有楽町線麹町駅下車；半蔵門方面口より徒歩1分；新宿通りに面する9階建てビル）

主催（社団法人）東京地学協会

問い合わせ先：東京地学協会・行務委員会
TEL 03-261-0809

吉田栄夫（極地研） TEL 03-962-4711

野上道男（都立大） TEL 03-717-0111（3716）

FAX 03-725-8101

シンポジウム

平成4・5・6年度白鳳丸研究計画立案

東京大学海洋研究所から標記の名称のシンポジウムの開催の通知がありました。白鳳丸を利用して研究を行う希望のある方は，研究計画を下記にしたがって提出して下さい。

記

1. シンポジウム開催日時
平成2年10月22日（月）10：00～17：00
平成2年10月23日（火）10：00～17：00
2. シンポジウム開催場所 東京大学海洋研究所
3. 世話人 平 啓介，小林和男，野崎義行，
太田 秀，杉本 隆成
4. 研究計画提出期限 平成2年9月10日（月）
5. 研究計画提出先
〒164 東京都中野区南台1-15-1
東京大学海洋研究所
事務局総務課共同利用掛
TEL 03-376-1251（代）

6. 研究計画は，所定の用紙に記載のうえ，ご提出いただくことになっておりますので，用紙ご入用の方は上記へ直接ご請求下さい。

第15期日本学術会議会員の選出手続き始まる

平成2年8月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議では、現在、第15期会員を選出するための手続きが進められています。今回の日本学術会議だよりでは、その手続きの概要に加えて、来年度に開催される共同主催国際会議等について、お知らせいたします。

第15期日本学術会議会員の選出について

日本学術会議では、現在、第15期会員（任期：平成3年7月22日から3年間）を選出するための手続きが進められている。

先般、最初の手続きとして、6月末日を締切期限に、各学術研究団体からの登録申請の受付が行われた。今回申請のあった団体数は、942団体であった。

今後引き続き行われる手続きとその日程の概略は次のとおりである。

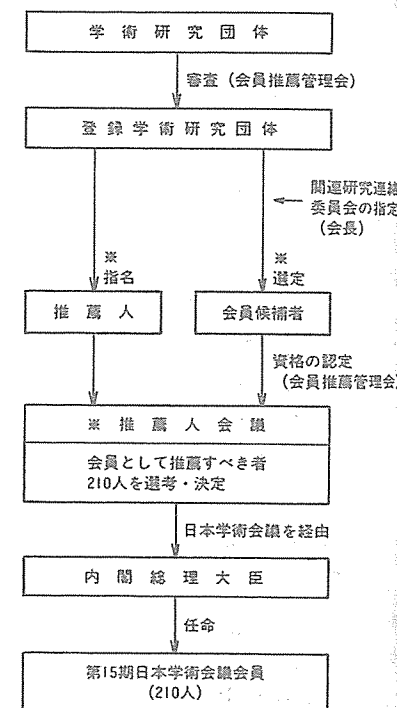
《平成2年》

- ・9月上旬……登録審査結果の通知
- ・〃……関連研究連絡委員会（注）についての意見聴取
- ・11月30日まで……関連研究連絡委員会の指定
- ・12月上旬……会員の候補者の選定及び推薦人の指名の依頼

《平成3年》

- ・1月31日まで……会員の候補者の届出の締切り
- ・2月20日まで……推薦人（予備者を含む）の届出の締切り
- ・3月20日まで……会員の候補者の資格の認定等の通知
- ・3月下旬……推薦人に会議開催等の通知発送
- ・4月20日まで……候補者関係異議の申出に対する決定
- ・5月中旬から
6月上旬まで……推薦人会議（会員及び補欠の会員として推薦すべき者を決定）
- ・6月中旬……日本学術会議を経由して内閣総理大臣へ推薦
- ・7月22日……第15期日本学術会議会員の任命

《会員選出手続きに関するフローチャート》



※ 指定された関連研究連絡委員会により区分された学術研究領域ごとに行われる（下記の注）を参照。

（注）関連研究連絡委員会：学術研究団体がその目的とする学術研究の領域と関連する研究連絡委員会として、届け出た研究連絡委員会。届け出た関連研究連絡委員会が複数あるときは、日本学術会議会長は、登録学術研究団体の意見を聴いて関連研究連絡委員会を指定

（限定）する。

登録学術研究団体は、この指定された関連研究連絡委員会により区分された学術研究の領域ごとに、会員の候補者及び推薦人を届け出ることになる。

平成3年(1991年)度共同主催国際会議

本会議は、昭和28年以降、学術関係国際会議を関係学術研究団体と共同主催してきたが、平成3年（1991年）度には、次の6国際会議を開催することが、6月19日の閣議で了解された。（カッコ内は、各国際会議の開催期間と開催地）

- ◆第21回国際農業経済学会議
（平成3年8月22日～29日、東京都）
共催団体：日本農業経済学会外4学会
- ◆国際医用物理・生体工学会議（第16回国際医用生体工学会議・第9回国際医学物理学会議）
（平成3年7月7日～12日、京都市）
共催団体：（社）日本エム・イー学会外1学会
- ◆国際純正・応用化学連合1991国際分析科学学会議
（平成3年8月25日～31日、千葉市）
共催団体：（社）日本分析化学会
- ◆第22回国際シミュレーション&ゲーミング学会総会
（平成3年7月15日～19日、京都市）
共催団体：日本シミュレーション&ゲーミング学会
- ◆一般相対論に関する第6回マーセルグロスマン会議
（平成3年6月23日～29日、京都市）
共催団体：（社）日本物理学会
- ◆第22回国際動物行動学会議
（平成3年8月22日～29日、京都市）
共催団体：日本動物行動学会

第4部報告—科学技術庁大型放射光施設建設計画について（要旨）

（平成2年5月25日、第755回運営審議会承認）
予算規模約一千億といわれる科学技術庁大型放射光施設が実施段階に入った。このような大型施設の順調な建設、稼働後の有効利用のためには、研究者、技術者の努力はもとより、関連政府諸機関相互の理解と協力が不可欠である。我が国の放射光研究開発はこれまで大学等基礎的研究機関を中心として発展してきたのであるが、その経験と成果は今回の大型計画においても活用され、さらに発展せられるべきである。日本学術会議は、先に「大学等における学術研究の推進について—研究設備等の高度化に関する緊急提言—（平成元年第107回総会勧告）」において、大学等と各省庁研究機関の間の研究設備の相互利用、研究者の相互交流の必要性を指摘した。第4部は、今回の科学技術庁の大型放射光施設の建設及び共同利用がその重要な具体例であると判断し、物理学、結晶学、生物物理学三研究連絡委員会委員長より日本学術会議会長あての申入れにもとづいて本報告をとりまとめたものである。

化学研究連絡委員会報告—大学における研究環境、特に研究実験室のスペースについて（要旨）

（平成2年5月25日 第755回運営審議会承認）
我が国においては、基礎科学の振興が叫ばれながら、大学等の研究環境の改善は長い間取り残されたままである。日本学術会議化学研究連絡委員会の調査によると、我が国の大学における化学関係の学科の研究実験室のスペースを研究者一人当たりとした場合、欧米の大学と比べて2分の1から3分の1の広さに過ぎず、実験台や戸棚などの占める面積を勘定に入れると、実質的には3分の1から4分の

の1のスペースしかない極度の狭隘さである。

各種の危険を伴う化学実験の安全性を確保するためには、大学等の研究実験のスペースを抜本的に改善することが絶対に必要であり、差し当たり現在の面積を倍増する必要がある。

日本学術会議主催公開講演会開催のお知らせ

本会議では、このたび、次の2つの公開講演会を開催いたします。是非、多数の方々の御来場をお願いします。

I 公開講演会「高度技術と市民生活」

- 日 時：平成2年10月13日(土)13時30分～17時
- 会 場：兵庫県社町福祉センター大ホール
（兵庫県加東郡社町26番地）

●演題と講演者

- ①「高齢化社会と高度技術」
原澤 道美（第7部会員、東京通信病院院長）
- ②「消費生活と高度技術」
正田 彬（第2部会員、上智大学教授）
- ③「地域振興と人間主導型高度技術」
竹内 啓（第3部会員、東京大学教授）

II 公開講演会「資源エネルギーと地球環境に関する展望」

- 日 時：平成2年10月30日(火)13時～17時
- 会 場：日本学術会議講堂
（東京都港区六本木7-22-34）
（地下鉄「千代田線」乃木坂駅下車徒歩1分）

●演題と講演者

- ①「人間と環境」
大島 康行（第4部会員、早稲田大学教授）
- ②「エネルギー資源」
石井 吉徳（第5部会員、東京大学教授）
- ③「エネルギーと経済問題」
則武 保夫（第3部会員、立正大学教授）
- ④「エネルギーとCO₂対策」
上之園親佐（第5部会員、摂南大学教授）

★ 両講演会とも、入場無料です。

【問い合わせ先】

日本学術会議事務局庶務課「公開講演会係」
電話 03-403-6291 内線 227、228

日学双書の刊行案内

日本学術会議の総会並びに主催公開講演会の記録を中心に編集された次の日学双書が刊行されました。

- ・日学双書 No.7 「地球環境問題」
- ・日学双書 No.8 「人間は地球とともに生きられるか」
尚書とも、定価1,000円（消費税込、送料210円）

【問い合わせ先】

（財）日本学術協力財団（電話 03-403-9788）
〒106 東京都港区西麻布3-24-20、
交通安全教育センタービル内

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34
日本学術会議広報委員会 電話03(403)6291

タイ・トルコ見聞録

日本の地熱地帯とトルコ共和国におけるプレートとの衝突境界やタイ北部のような非火山性といわれている地熱地帯に放出された気体には、どのような特徴や相違があるのだろうか？ そんな疑問から気の合った(?)友達たちとタイ王国やトルコ共和国に出かけている。荷物は膨大、病気は怖い、おまけに言葉はだめ。エピソードを通じて、タイやトルコを紹介してみたい。

3年前(1987)の夏、文部省の海外学術研究でタイ北部を訪れた。隊員は全員秋田大学で気心が知れているが、私は他国への入国は初めてだ！ どうした訳か？ みんなの荷物と調査道具をキャリア一杯にしたまま私と友人のたった2人だけが取り残された。不安の中！ 入国管理官(?)が何か言っている。私達も英単語(?)を投げ帰したが双方良く分からない。ワーワー言っているうちに、次々に出てくる人々に押し出されて検問を通過してしまった。いいのだろうか？

バンコクのタイ鉱物資源局(DMR)での調査の打ち合わせやタイ国内調査に必要なIDカードの発行手続きを終えた後、マラリヤやデング熱などの予防法を拝聴した。血を吸うときお尻を持ち上げている蚊がいけないそう。じっと吸われるのを見ているのだろうか？ 結局、予防法はないそうである。そこへ、マラニヤで倒れた人が次々に運び込まれた。おまけに、コブラやグリーンズネークがどうしたこうした？ 不安の極致！

タイ北部の道路事情は急激に良くなったらしい。加えて、ほとんど車は日本製(エンジンと車体だけらしい)！

さらに、エアコンもあり快適(?)。走るの走らないの大変なスピードである。有名なチェンマイからマンマとの国境付近にある町ファンへ移動する100km程度の道筋に3度も人々がはねられて倒れたままである。あのままで良いのかとドライバーに聞くと、軽くNo problem! と答えた。啞然！

翌年の夏、これも文部省の海外学術研究であるが、他大学間のメンバーから成るギリシャ・トルコ調査隊に参加した。今度はタイでの経験がものをいうと思い気や、所変われば品変わる訳である。まずは、ギリシャの入国手続きである。押し出されるところか調査道具が差し押さえられた。相手が何を言っているのか良く分からない。英語の達者な隊長が交渉している。どうしたのかと聞くと自分で聞けと怒っている。結局、税金(?)を払わされて無事入国！ アテネでは200人もの死者を出したほどの猛暑！ さらに、夜9時過ぎまで明るくホテルにエアコンもない。夜の12時過ぎまで子供達が外で遊んでいる！ アテネ大学助教授曰く、「仕事は朝8時から昼2

時まで！」。我々は働き過ぎだと隊長に進言した。

次はトルコだ！ 不思議にも無事入国。アンカラや北部トルコは東北地方の温泉地のように涼しく快適だ！ しかし、西部、南部は猛暑！ おまけに岩と砂の世界で羊ばかり。さらに、ホテルや調査用の黒い公用車はエアコンなし！ 45℃にもなった。タイの暑さなど問題にならない。さすがの勤勉・タフな(?)日本人も連日の暑さでボオーとしはじめた。忘れ物も多くなり、遂に宿泊したホテル名も忘れてしまった。

トルコでは国立鉱物調査開発研究所(MTA Institute)の研究者はともかく、そのドライバーや市民はトルコ語かドイツ語を使い英語がほとんど通じない。私はドライバー達に身振り手振りや目技を駆使した。しかし、おまけに耳に残るのは、女性の入浴時間だ！ 早く調査を終えろと言うせっかちなMTAの研究者のhurry up! の大声のみである。車での移動中もドライバーは無口で会話がな。あるのは、私の歌(?)とタイにも勝るスピードで走る車の騒音のみ！ 3度衝突をかけて1度は死んだと思った。おまけに、私の食事はカバブ(焼き肉)とカルプス(スイカ)ばかり。ストレスが溜まる。こんな時、日本人々との交流はストレスを開放し明日への活力源になる。当時アンカラに駐在しておられた地質調査所の豊氏に大変お世話になった。話によるとトルコから200年より古いものは持ち出せないそうだ。手鎖りの刑?! お土産には注意とのこと！ 石は200年より古い？ しかし、岩石試料はMTAのせわしい有能な研究者のお陰で無事日本に届いた。

一方、タイ国での研究者のみならずDMRのドライバー達も英語(?)を話す。それでも、初めは良く分からない。地熱地帯に着くと、皆でジオトモロとかなんとか言っている。温泉水の温度を計るので温度計を取って欲しいと頼むとトモメーターと言って手渡してくれた。そうか！ ジオトモロとはジオサーマルのことなのだと気付く。ジオトモロではなくジオサーマルと発音するんだと教えるが受け付けない。彼らの方が英語(?)がうまいのだから！ しかし、こちらも調査では負けられない。身振り手振りや納豆のような粘っこい目付きを駆使する。道が違う！ マップがおかしい？ そのうち、不思議に意志が通じ始めたのである。

タイ国での大きな収穫は、研究者との交流もさることながら、ドライバー達との交流であった。タイの言葉や社会問題などいろいろな事を教えてくれた。タイでは日本製は車や電気製品だけではない。テレビ漫画まで「一休さん」なのである。私は飾り気のない愉快な友人を得たのである。彼らを通じて、もう一つのタイ国を知れる機会を得たのかもしれない。

秋田大学鉱山学部 北 逸郎

編集者 高野稔一郎 〒153 東京都目黒区駒場3丁目8番1号 東京大学教養学部化学教室 電話 03(467)1171
発行者 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内 電話 東京 03(817)5801

日本地球化学会ニュース

No. 123

1990. XI. 20

1991年度日本地球化学会春季シンポジウム

主催 日本地球化学会

日時 1991年4月3日(水)~4日(木) [予定]

会場 共立女子大学八王子校舎

(東京都八王子市、中央線高尾駅よりスクールバス10分)

[本年度も地球惑星科学関連学会合同大会(4月2日~5日)の一環として開催されます]

地球惑星科学関連学会1991年合同大会

地震学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、日本火山学会、
日本測地学会、日本地球化学会

日時 1991年4月2日(火)~5(金)

会場 共立女子大学八王子校舎

1991年度日本地球化学会春季シンポジウム

一般講演 4月3日(水) 9:00~17:00

(招待講演数件も予定しています)

ポスターセッションの場合の討論時間は4月4日(木)が予定されています。(下記の合同大会のポスターセッションの項を参照下さい)

多数の講演申込を歓迎致します。

地球惑星科学関連学会1991年合同大会

1) 共通セッション

(共通セッション一覧表を参照して下さい)

2) 今回の合同大会では、ポスターによる発表を充実させる予定です。広い会場で、1発表あたり1.8m×1.2mのボードが使えます。掲示日数を長くするとともに、ポスター会場以外は休みの時間帯を設ける予定です(4月4日が予定されています)。

3) 口頭発表の会場では、スライドプロジェクター1台と、オーバーヘッドプロジェクター1台が使えます。

4) 4月3日(水)夜に合同大会懇親会が予定されています。

研究発表申込要領

1) 地球化学会春季シンポジウム・合同大会共通セッションとも、研究発表申込書と予稿原稿を提出して下さい。

2) 研究発表申込書は綴じ込みの用紙をご使用下さい。合同大会共通セッションへ申し込む場合は、コピーを1部添付して下さい。

3) 予稿原稿の書式は、地球化学会春季シンポジウム・合同大会共通セッションとも、別記の書式に従って下さい。合同大会共通セッションへ申し込む場合は、コピーを1部添付して下さい。

4) 予稿原稿の長さ

合同大会共通セッション

招待講演: 2ページ以内

一般講演: 1ページ

地球化学会春季シンポジウム: 2ページ以内

研究発表申込先

- 1) 地球化学会春季シンポジウム
〒113東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学理学部化学教室
清水 洋
TEL. 03-812-2111 (内線4350)
FAX. 03-814-2627
- 2) 合同大会共通セッション
各セッションの主世話人
(共通セッション一覧表を参照下さい)

研究発表申込締切日

- 1) 地球化学会春季シンポジウム
研究発表申込書の提出: 1991年1月28日(月)
予稿原稿の提出: 1991年2月18日(月)
- 2) 合同大会共通セッション
研究発表申込書および予稿原稿を同時に提出して下さい。
締切 1991年1月28日(月)

参加費 一般 1,000円; 学生 500円

共通セッション一覧表

それぞれ、1行目が‘セッション番号とセッション名’、2行目以降が‘主世話人(研究発表申込先)/副世話人’、‘世話人から投稿者への呼びかけ’です。

共通セッション

A 01. 海面変動、海洋変動および地球ダイナミクス
瀬川爾朗(〒164 東京都中野区南台 1-15-1 東京大学海洋研究所)/今脇賢郎(鹿児島大水産)

いまや地球研究は、固体の部分と流体の部分とを分けて論じることではできないところまで進んできた。固体圏から水圏、気圏へのエネルギーフラックスが重要であると同時に、太陽エネルギーを含めた水圏、気圏からの固体地球へのエネルギーフィードバックも無視できない。地球のダイナミクスを論じるとき、大気、海洋、固体地球のみつどもえの相互作用を考えなければならない。本セッションはこのような観点から、現在・過去の固体地球の運動(回転、極運動、自由振動、プレート運動など)、大気の循環、海洋のダイナミクス(海流、潮汐、海面変動など)の研究者が一堂に会して情報交換をし、今後の研究方針などを検討することを目的とする。測地、地震、海洋、気象の研究者に呼び掛けたい。

A 02. 希土類元素の挙動からみた地球・惑星系

田中 剛(〒305 つくば市東1-1-3 工業技術院地質調査所地殻化学部)/富樫茂子(地調)
日本の研究者が世界に先がけて開拓した“地球科学の道具”、「希土類元素存在度パターン」が生まれて30年になる。ここに、原始太陽系の形成と分化マントルと地殻におけるマグマの生成と分化、岩石圏と水圏の相互作用、...など、希土類元素を中心とした微量元素の挙動から把握される地球科学的現象について、観測・実験・理論の三面から議論をすすめたい。

A 03. 地球・惑星の進化とダイナミクス

本多 了(〒730 広島市中区東千田町 1-1-89 広島大学理学部地学科)/加藤 工(東北大理)・佐々木 晶(広島大理)
地球・惑星が形成されてから現在に至るまでの物理的、化学的進化を引き起こした物質移動のダイナミクスを解明することは、地球・惑星の総合的理解に不可欠である。このセッションでは、進化過程における様々な活動の長期的変動に関わる問題、例えばマントル対流、火成活動、惑星外との相互作用、大気・海洋との相互作用等の理論的、実験的研究および野外調査観測の成果の発表を歓迎する。

A 04. 地球中心核

大谷栄治(〒980 仙台市青葉区荒巻字青葉 東北大理理学部岩石鉱物鉱床学教室)/佐藤忠弘(国立天文台水沢)

地球の中心部の地球核とそれに接する下部マントルの構造とダイナミクスを、地震学、測地学、地球電磁気学的観測や理論などにもとづいた研究、超高温実験や物性理論などにもとづいた物質科学的研究などの成果から、総合的に議論したい。また初期地球における地球核の分離形成過程、核とマントルの平衡の有無、核内部での流体運動などに関する理論的、実験的研究なども大歓迎。そして、時間的・空間的に動的な核・下部マントル観を得ることを目指したい。

A 05. マントルの物質・構造・ダイナミクス

中西一郎(〒060 札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学理学部地球物理学教室)/佐藤博樹(岡山大地球研)
マントルの構成と現在のダイナミクスを、地震学・地球電磁気学・物質科学・地球化学等の成果から総合的に議論したい。マントルの地震学的・電磁気学的・化学的不均質性、低速度層の実体、マグマの発生と上昇、スラブの構造、マントル不連続面の起伏異方性、深発地震、マントル物質の相転移・相平衡と物性、マントルの成層構造・温度構造・レオロ

予稿原稿の書式 (地球化学会春季シンポジウムと合同大会共通セッションに共用)

A 4 判の紙 (注意!)	
12 mm 35 mm 25 mm 10 mm 25 mm 25 mm	15 mm 12 mm 題 目 (和文) 著者・所属 (本文が英文の場合は省略してもよい) 題 目 (英文) 著者・所属 連名の場合は、スピーカーの左肩に丸印を付ける。グループで申し込む場合も、スピーカーを明示する。 同 上 この部分は、発表番号を貼ります。絶対に何も書かないでください。 本 文 (和文または英文。ただし、英文の場合は2段に分けない) 共通セッションに申し込む場合は、コピーを1部添付する
注 意 - ここに書いてある枠は、範囲を示すもので、実際は不要です。 - 原稿は約80%に縮小されて、B5判の予稿集になります。文字が小さくなりすぎないようにご注意ください。 - ワープロの印字が薄すぎないように、印字むらのないように、ご注意ください。手書きの方は、黒インクを使ってください。鉛筆やボールペンはきれいに印刷されません。 - 鮮明であれば、B4判に書いたものを、この規格に縮小コピーして提出してもかまいません。ただし、図は原版を貼ってください。 - 写真は製版工程が別ですので、貼り付けずに、位置をはっきり指定して同封してください。 - 予稿原稿の長さ 合同大会共通セッション 招待講演: 2ページ以内 一般講演: 1ページ 地球化学会春季シンポジウム : 2ページ以内 (2ページ目は題目欄は不要)	

研究発表申込書

地球惑星科学関連学会1991年合同大会

合同大会共通セッションへ申し込む場合は、この申込書（コピーを1部添付）を
予稿原稿の上にして、必ずクリップでとめて提出してください。

講演時刻（記入不要）		発表番号（記入不要）	~~~~~
発表 表 題 目			
60字（英文は120字）を超えた分はプログラムに印刷されません。			
発表者氏名・ふりがな・所属	でん／なかひさ たなか／ひさし 記入例：田 中久・田中 久（建築研） C. F. Richter (Caltech) （和文の場合です） 連名の場合はスピーカーの左肩に丸印を付ける。グループの場合もスピーカーを明示する。		
	索引作成に不可欠ですので、必ずふりがなを振ってください（例にならって姓と名を区分する）		

予稿原稿の題目欄が英文のみの場合は英文で記入する等、裏面の表記法についての注意に従って御記入下さい。

希望セッション区分（○で囲む）	共通 固有	希望セッション番号	
希望発表方法 （○で囲む）	第1希望： 口頭発表 ポスター発表		
	第2希望： 口頭発表 ポスター発表 第1希望が通らなければ取り消す		
希望講演時間（討論を含み15分以内）	分	割当時間（記入不要）	分
スピーカーの主な所属学会（○で囲む）	地震 SGEPSS 火山 測地 地球化学		
申込責任者（大会まで連絡のとれる人、なるべくスピーカー）		氏名	
連絡先			
電話番号（内線）		FAX	

プログラム編成の都合によっては、セッション、発表方法、講演時間をご希望にそえない場合があります。あらかじめご了承ください。
地球化学会春季シンポジウムへ申し込みの場合は、「希望セッション番号」、「希望講演時間」についても記入不要です。

研究発表申込書の太枠内の表記法

プログラムの印刷と、プログラム・予稿集に付ける索引の作成は、研究発表申込書の記載に基づきます。

見やすく使いやすいプログラム・索引にするために、以下の表記法に従ってください。

A. 予稿原稿の題目欄（題目・著者・所属）が英文のみの場合

1. 発表題目と発表者氏名は英文で書く。題目は、全体の先頭文字のみ大文字とし、他は capitalize しない。氏名は、T. Terada, K.E. Bullen のように書く。
2. 所属に関しては、日本国内機関は和文略称、海外機関は英文略称を書く。広く流布した略称があればそれを使い、また Univ. のような短縮形を用いる（通総研, Stanford Univ. など）。

例：（発表題目）A fault model of the 1989 Loma Prieta earthquake derived from the geodetic and seismic data （発表者氏名・所属）°K. Miyashita（茨城大理）M. Lisowski（USGS）

B. 予稿原稿の題目欄が和文・英文併記の場合

題目は和文で記入する、氏名は本人が日常用いる表記のままでよい（今村明恒, M. Ewing, ゲラー・ロバートなど；予稿原稿の和文題目欄の著者の表記も必ずこれに一致させる）。所属は上記に従う。

なお、索引は和文と英文に分けられるので、同一人が和文索引と英文索引に別々に掲載される場合がある。

日本地球化学会（学会賞等）受賞候補者推薦用紙

日本地球化学会授賞規程により、下記の者を日本地球化学会（柴田賞、学会賞、奨励賞、学会賞）受賞候補者として推薦します。

1991年 月 日

推薦者

氏名

印

記

1. 候補者氏名、生年月日、略歴（わかる範囲でお書き下さい）

2. 受賞の対象となる業績等の題目

3. 推薦理由

ジー、ジョイド、同位体比異常など、広範囲な問題を扱いたい。

A 06. 地殻の構造と物性

伊藤 潔 (〒611 宇治市五ヶ庄 京都大学防災研究所地震予知研究センター) / 古川善紹 (東大震研)

地殻の構造は古くから種々の方法で調査研究されてきた。最近では、地震波速度、熱的、電磁氣的、重力および構成岩石・鉱物などの構造が、多くの地域で明らかにされている。また、これらの構造が、室内実験による岩石・鉱物のレオロジーと結びつけられることによって、地殻下部の流動、地震発生など地殻のダイナミクスの解明に発展しつつある。地殻の構造と物性に関する観測成果およびその解釈に関する研究発表を求む。

A 07. テクトニクス

玉木賢策 (〒164 東京都中野区南台 1-15-1 東京大学海洋研究所) / 瀬野徹三 (東大震研)

地球表層部での地学事象を、もっと深くもっと総合的に理解することをめざしたセッションです。地殻およびリソスフェア（海陸を問わず）の進化、運動、構造、変形等々や、リソスフェアとアセノスフェアの相互作用をターゲットにした研究が、本セッションの主な対象となるでしょう。ポスター発表は大歓迎です。

A 08. 伊豆・小笠原弧北端部の地殻活動とその背景

小山真人 (〒422 静岡市大谷 836 静岡大学理学部地球科学教室) / 山岡耕春 (東大震研)

活発な地震・地殻変動・火山活動の場である伊豆・小笠原弧北端部。膨大なデータが集積した現在、地球物理・地球化学・地質・岩石・地形など、あらゆる手法による海陸からのアプローチの成果を結集し、その活動のメカニズムを総合的に探りたい。各分野からの招待レビュー講演や、ポスター発表の積極的利用も予定している。

A 09. 地殻変動

石井 紘 (〒113 東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学地震研究所) / 多田 堯 (地理院)

地震・火山およびテクトニクスなどに関連した地殻変動現象に関して、観測・解析、理論、数値実験など多様なアプローチにもとづいた議論を進める。地殻変動観測計器の開発研究およびデータ処理・解析方法の研究についても歓迎する。

A 10. 重力

大久保修平 (〒113 東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学地震研究所) / 山本明彦 (北大理)

重力のもつ意味が大きく変わろうとしている。それは、Hi-Tech の波 (GPS, 超伝導および絶対重

力計、人工衛星 Altimetry など) と、研究者のたゆまざる努力 (精密、水平高分解能測定) とがもたらしたものである。重大な転機を迎えようとしている今日、グローバルな理論・応用からローカルな話題まで、重力理論、重力異常、重力時間変化、重力測定、潮汐、ジョイドなど重力に関わる諸問題を議論したい。

A 11. 年代測定による岩体の熱史

松田高明 (〒671-2 姫路市書写 2167 姫路工業大学地学研究室) / 西村 進・田上高広 (京大理)

各種方法、各試料による年代決定法は、岩体の冷却速度に伴ってそれぞれの閉鎖温度が異なり、さらに、とくにフィッシュン・トラック法では飛跡の長さも変化する。これらの結果をまとめて岩体の詳細な熱史を組み立てることができ、テクトニクス等に応用できる。このセッションでは、各種方法、各試料による閉鎖温度の決定、測定法の詳細および応用面でまとめる。

地球惑星科学関連学会1991年合同大会共通セッション「希土類元素の挙動からみた地球・惑星系」について

日本の地球化学者が世界に先がけて考案した地球科学の道具“希土類元素存在度パターン”が生まれて30年になる。隕石と頁岩の関係から始まったその解釈は、先太陽系時代の超新星から生体内でのトレーサにまで拡大されてきた。今や地球科学の主な雑誌にパターンの解釈に関する論文が載らない時はない、と言っても過言ではないであろう。

この共通セッションでは、原始太陽系の形成と分化、マントルと地殻におけるマグマの生成と分化、さらには岩石圏と水圏・生物圏の相互作用、…など希土類元素を中心とした微量元素の挙動から把握される地球・惑星科学的事象について、観測・実験・理論の三面から議論を進めたいと考えております。この企画については、既に地震学会、地質学会、火山学会などの会員から大きな関心が寄せられており、地球化学会としても十分な態勢でこれを受け止めたいと考えております。この共通セッションに多数の会員が応募、討論に御参加下さることをお願い申し上げます。

コンビーナ 地質調査所 田中 剛

“ 富樫茂子

日本地球化学会「柴田賞, 学会賞, 奨励賞, 功労賞」

受賞候補者推薦の募集

応募期限 1月31日(木)

日本地球化学会授賞規定により、柴田賞、学会賞および奨励賞、功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。

つきましては、下記ご参照のうえ会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を自薦他薦を問わずご推薦下さるようお願いいたします。

候補者の資格：

(柴田賞) 地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあった者

(学会賞) 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。

(奨励賞) 1956年4月2日以降に生まれた本会正会員(学生会員を含む)で、地球化学の進歩に寄与する秀れた研究をなし、なお将来の発展を期待しうる者。

(功労賞) 我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦書を、1月31日(木)までに学会事務所へ(当日消印有効)。

提出先：〒113 東京都文京区弥生2-4-16

日本学会事務センター内

日本地球化学会受賞者選考委員会

☆推薦書は同封の所定用紙もしくはこれを複写したものをご使用下さい。なお、この件についてのお問い合わせは本会庶務担当幹事(下記)まで。

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部地殻化学研究施設 野津憲治

電話 (03) 812-2111 内線4624

FAX. (03) 816-1784

日本地球化学会学会賞等の受賞候補者のご推薦を乞う。

1991年度受賞者選考委員会

委員長 角皆 静男

去る10月の評議員会で学会賞等の受賞候補者が多数推薦されるように授賞規定が改訂され、1991年度の選考委

員会が構成されました。

この改訂により、多分、推薦しやすくなったと思います。ただ、各種の賞がどのように違うのかわからないという声を耳にします。正しくは授賞規定を厳密に読んでいただくよりほかはありませんが、規則検討委員会で話されたことなどをもとに委員長のまったくの私見ですが、この点を少し解説させていただきたいと存じます。

柴田賞：我々本会会員からみて地球化学に顕著な功績があった者ということですから、外国人でも会員外でも構わないことになります。ただ、その評価を総合的立場で行うとすれば、その全貌がわかってから、つまり会員の場合だったら、現役を退りぞいてからの方が判断しやすいと思われます。

学会賞：優秀な業績に対して与えられるものですから、その積み上げにはかなりの時間が必要と思われます。しかし、それをバネにさらに日本の地球化学全体のために働いてもらうことも必要と思われます。つまり、現役で活躍中の者が好ましいのではないのでしょうか。

奨励賞：これは過去の積み上げより、将来性に力点を置いた賞かと思われます。従って一報でもキラリと光るものがあれば対象になると考えられます。

功労賞：地球化学の発展には、様々な面からのサポートが必要と思われます。いわゆる研究以外のすべてを含めてよいのではないのでしょうか。また、失礼ない方かもしれませんが、アマチュアの研究も該当すると私は考えています。

同封の推薦用紙を見てもおわかりのように推薦方法は極めて簡単になっています。しかし、この推薦書だけで選考するわけではありません。選考用の資料は別に用意します。その資料作製にあたって推薦者の皆様にご協力願う場合もあるかと思われます。その折はよろしくお願ひします。

最後に本会の規定では選考委員は被推薦者はもちろん推薦者にもなれないことになっています。この点をお含みのうえ是非多数の受賞候補者をご推薦いただきたいと思います。

日本地球化学会1990年度第2回評議員会議事録

日時：1990年6月23日15:00-18:30

場所：東京大学教養学部

出席者：綿坂邦彦会長、脇田宏副会長、海老原充、金森悟、北逸郎、佐野有司、清水洋、下山晃、鈴木俊雄、高野穆一郎、田中剛、長尾敬介、野崎義行、野津憲治、半田暢彦、藤原祺多夫、松田准一、松久幸敬、柳 哮、吉田 稔、各評議員

1. 前回議事録を了承した。会長より、評議員会議事要旨を議事録了承の前に幹事会の責任でニュースに掲載したい旨提案があり、了承された。

2. 報告事項

2-1 庶務(野津評議員)

A. C. Lasaga School for Geochemistry and Mineralogyの後援を承諾した。地球化学研究協会学術賞「三宅賞」、「朝日賞」、「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」3件の受賞候補者の推薦依頼があった。トヨタ財団、地球化学研究協会から研究助成の募集があった。学会講演募集2件、学会・研究会プログラム4件が回覧された。富永健、巻出義紘、F. S. ローランド「フロン-地球を蝕む物質」(東京大学出版会)、春日井昭教授退官記念論文集(北海道教育大学)、南極資料Vol.34, No. 1(国立極地研究所)の献本があった。日本学術会議第15期会員選出のための学術研究団体の登録申請を行った。平成2年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付内定が通知され、Geochemical Journalに対して1,400,000円の補助が内定し、交付申請書を提出した。

2-2 幹事会(野津評議員)

6月16日東京大学理学部において幹事会を行った。出席者は、綿坂会長、脇田副会長、海老原、清水、高野、野津、各幹事で、第2回評議員会の議題内容について議論した。

2-3 編集

(1) Geochemical Journal(松久評議員)

Vol. 23, No. 6は配布完了。Vol. 24, No. 1は印刷中。今年度の投稿件数は6月23日現在21編、他に特集号(Marine Geochemistry)原稿10編。

(2) 地球化学(金森評議員)

Vol. 24, No. 1は昨年引き継いだ4編と、昨年の奨励賞受賞者への依頼2編で編集。今年度の投稿件数は2編。

(3) ニュース(高野評議員)

No. 121は配布完了。No. 122は年会プログラ

ムを中心に8月中に配布予定。

2-4 行事

(1) 春季シンポジウム(清水評議員)

4月7日、地球惑星科学関連学会1990年合同大会に参加する形で、東京工業大学で行われた。一般講演8件、招待講演4件、参加者100名余であった。

(2) 1990年度新潟年会(鈴木評議員)

10月3日から5日新潟大学教養部で4会場と特別講演会場とを用いて行う。6月20日現在218件の講演申し込みがあった。特別講演を2件を予定している。

(3) 1990年 WPGM 金沢会議(清水評議員)

参加登録は6月21日締め切り、18名の登録があった。会議期間中の受付責任者は野津評議員がたつことになった。

(4) 1991年度愛媛年会(綿坂会長)

立川評議員より、10月の評議員会の時に概要を説明する旨連絡があった。

2-5 会員問題検討委員会(脇田副会長)

6月23日12時より第1回委員会を開き、新会員勧誘の方策が話し合われた。年会の要旨集用紙発送の際入会申込書を同封する、年会受付で入会勧誘を行う、入会勧誘のポスター、文書を作成し、各種研究教育機関に配布することを当面実施することとした。

2-6 学術会議

(1) 陸水研連(野津評議員)

1993年IAHS(国際水文科学連合)の地球化学会選出組織委員を小倉評議員から福島和夫会員に代わった。

(2) 地質科学総合研連(脇田評議員)

「人間活動と地球環境に関する特別委員会」の報告が議決された。地質学学科の科研費審査委員候補推薦依頼先学協会を6学会に増やしたが、従来どおり5学会にすることになった。

(6) IGBP 拡大分科会(半田評議員)

4月に勧告案を上程、議決され、各省庁での実行案が作成されている。

3. 審議事項

3-1 入退会承認

1990年1月1日から5月31日までの入会退会は、以下の通り承認された。

入会(40名)

正会員(36名): 天野 光、一色健司、牛木久雄、小出良幸、大貫敏彦、田切美智雄、小泉尚嗣、小松善伸、佐藤芳和、斎藤良介、古山勝彦、諏訪茂雄、中島和夫、奈良岡浩、横内陽子、Miguel PARADA、(以下学

生)坂本 稔, 佐藤 努, 渡辺孝志, 川端一史, 小野寺毅, 時枝隆之, 皆川昌幸, 斎藤千鶴, 渡辺 豊, 平田岳史, 鳥越紀子, 小林貴之, 鈴木勝彦, 宮島利宏, 萩谷 宏, 尾寄大真, 能登征美, 古宮正利, 黒木紀子, 窪田正和

賛助会員 (4名): ドリコ株式会社 (2口), 東京ガス株式会社企画部 (5口), 東邦ガス株式会社企画部技術・調査 G (1口), 勸新潟県環境衛生研究所 (1口)。

退 会 (正会員16名): 松本幡郎, 村越 司 (逝去), 竹田栄蔵, 吉村広三 (逝去), 服部ゆう子, 浜田七郎, 大森昌衛, 岡野 純, 東野徳夫, 吉谷征男, 竹村元志, 金子恵美子, Karl H. WEDEPOHL, (以下学生) 原川裕章, 和田雄高, 藤原敏記

また, 会員の海外から国内への異動は, 以下の通りである。

海外→国内 (2名): 早瀬光司, 田口利典 (学生)

この結果, 会員数は以下ようになった。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1990年1月1日	891	12	5	908
入 会	36	4	0	40
退 会	16	0	0	16
1990年5月31日	911	16	5	932

学生57, 在外36を含む

3-2 長期会費滞納者, 住所不明者の取扱い

1990年6月現在の会費納入状況の説明があった。2月17日時点で24名いた国内の住所不明者は, その後の調査の結果, 逝去判明1名, 国内不在判明1名, 住所判明13名で, 現在でも手がかりが無いのは9名になった。不明者9名の取扱いを審議した結果, 8名を除籍することとした。海外会員は手がかりの無い3名を除籍することとした。除籍者は, 以下の通りである。

小泉盛人, 小林 功, 篠崎征夫, 滝本幹夫, 中田清志, 西原元男, 西山健二, 松本 勝, I. R. Plimer (Australia), Lawrence M. Barron (Australia), Gabor Dessau (Italy)

3-3 1989年度決算

鳥居監事の監査を受けた1989年度会計決算報告案が提出され, 審議の上, 了承された。

3-4 学会賞等受賞者の決定

学会賞等受賞者選考委員会 (脇田委員長) から1990年度の受賞者の選考結果が報告され, 以下の通り授賞を決定した。

日本地球化学会賞: 角皆静男博士 (北海道大学水産学部教授)

「大気-海洋系の地球化学的研究」

日本地球化学会奨励賞: 篠原宏志博士 (工業技術院地質調査所通産技官)

「マグマ-熱水流体系の地球化学的研究」

日本地球化学会奨励賞: 山本綱志博士 (神戸大学理学部助手)

「地質時代と現世の珪質堆積物の生成環境とその対比における地球化学的解析」

3-5 日本地球化学会授賞規程, 受賞者選考細則の見直しのための委員会の設置

学会賞等受賞者選考委員会 (脇田委員長) から現在の選考方法を改善する必要があると述べられ, 問題点が提起された。このため, 脇田副会長を委員長とする授賞規程, 受賞者選考細則見直し委員会を新たに設置することが了承された。委員として, 一国会会長, 角皆評議員, 佐野評議員, 酒井会員 (または松久評議員) がその任にあたることになった。

3-6 地球惑星科学関連学会1991年合同大会への参加
地震学会, 地球電磁気・地球惑星圏学会から呼びかけのあった地球惑星科学関連学会1991年合同大会 (1991年4月2~5日, 共立女子大学・八王子キャンパスを予定) への参加を決定した。合同大会開催連絡委員会への対応は行事幹事の清水評議員があたるが, 必要が生じれば地球化学会内に合同大会のための小委員会をつくることになった。この問題に関連して, 秋の年会と春の合同大会との特徴の付け方が議論された。

3-7 地球惑星科学関連学会連絡会 (仮称) への参加
合同学会開催連絡委員会とは別に地球惑星科学関連学会連絡会 (仮称) を作ろうとする動きがあり, 清水評議員がこの件の窓口になることを了承した。

3-8 GJ論文の著作権, 複写権

社団法人日本複写権センターの設立に伴い, 地球化学会刊行物の複写権委託についての協力要請が学会宛にきている。現状では, GJ論文の著作権が学会に帰属することが明示されていないので, 投稿規程にこの旨書き加えること, 著者との間で著作権について文書を交わすことが, 了承され, 具体的な方法は松久編集長に任せることになった。複写権の問題は, その後検討することとした。

3-9 その他

(1) 名誉会員の推薦にかかわる問題は, 会員問題検討委員会 (脇田委員長) で扱うことを了承した。

(2) 学術会議, 地球化学・宇宙化学研究連絡委員会 (増田委員長) から地球化学・宇宙化学の推進策を検討するWGに評議員会が対応して欲しいと要請があった。この件は, 具体的な要請がでしだい, 幹事会で対応することを了承した。

1990年度第3回評議員会議事録要旨

1990年度第3回評議員会は, 10月2日16時30分より新潟大学理学部で開かれ, 出席者は綿坂会長を始め17名であった。以下に議事の概要をまとめる。正式の議事録は, 次回評議員会で承認されたのち, ニュースに掲載の予定である。

1. 庶務, 編集, 行事に関する報告があった。1991年春季シンポジウムは, 地球惑星科学関連学会1991年合同大会に参加する形で, 4月2日~5日の期間中に共立女子大学八王子校舎で開催される。1991年度の年会は10月1日~3日に愛媛大学農学部で行われる。

2. 1990年6月1日から7月31日までの入会25名 (正会員23名, 賛助会員2名) 退会15名 (すべて正会員) が承認された。この結果, 会員数は7月31日現在, 正会員919名 (学生63名, 在外35名を含む), 賛助会員18名, 名誉会員5名, 合計942名となった。

3. 1990年度総会議事次第, および総会に提出される案件が審議された。なお, この件は本号のニュースに「総会報告」として掲載されている。

4. 日本学術会議第15期会員選挙に関して, 日本地球化学会から届出る会員候補者1名, 推薦人2名, 同予備者1名を投票で選んだ。その結果, 会員候補者として脇田宏副会長, 推薦人として綿坂邦彦会長, 増田彰正会員, 同予備者として松尾禎士会員を届出ることとなった。

5. 日本学術会議, 地球化学・宇宙化学研究連絡委員会 (増田委員長) から地球化学・宇宙化学の推進策を検討するWGに地球化学会が対応して欲しいと要請があり, 審議の結果, 合同の将来計画委員会を発足させることが了承された。委員長には脇田副会長があたり, 委員として研連から角皆, 石渡両委員, 学会から海老原, 松田両評議員, 和田秀樹会員 (静岡大学), 平田岳史会員 (地質調査所) の6名があたることが了承された。

6. 日本地球化学会授賞規程, 受賞者選考細則見直し委員会 (脇田委員長) から提案のあった日本地球化学会授賞規程, 受賞者選考細則の改正案について, 審議を行った。授賞規程は原案どおり, 選考細則は原案を一部手直しの上, 承認された。改正点は, 本号のニュースに掲載されている。この改正を受け, 1991年度受賞者選考委員会委員5名を投票により選出した。

1990年度 日本地球化学会総会報告

1990年度日本地球化学会総会は, 10月4日16時30分から新潟大学教養部において, 下記の総会次第にしたがって行われた。

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶
4. 年会実行委員長挨拶
5. 議事
 - 1) 1989年度事業報告ならび決算報告
 - 2) 監査報告
 - 3) 1990年度事業中間報告ならびに会計中間報告
 - 4) 1991年度事業計画ならびに予算案
 - 5) その他
6. 日本地球化学会賞, 日本地球化学会奨励賞の授与
7. 閉会宣言

総会において了承された, 1989年度事業報告, 1989年度決算報告, 1990年度事業中間報告, 1990年度会計中間報告, 1991年度事業計画, 1991年度予算を以下に順次示す。

1989年度事業報告

1. 会員状況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1989年1月1日	899	12	6	917
入会	24	1	0	25
退会	30	1	1	32
補正*	-2	0	0	-2
1989年12月31日	891	12	5	908

*: 数年前から懸案になっていた学会でまとめる会員数と学会事務センターへの登録会員数の差を後者の数にそろえた。

2. 年会, 委員会等開催数

年会1回 (10/3-5: 東京), 総会1回 (10/4: 東京), 評議員会4回 (2/18, 6/4, 10/2, 12/9), 幹事会5回 (2/8, 5/28, 9/30, 10/23, 12/2), 編集委員会4回, 春季シンポジウム1回 (4/10: 東京), 学会賞等受賞者選考委員会1回, IGBP委員会1回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 23 (1-6), 地球化学 Vol. 23 (1, 2)

4. ニュース発行

Nos. 116, 117, 118, 119

5. 学会賞等の授与 (奨励賞2件)

6. 学会共催

第26回理工学における同位元素研究発表会

日本宇宙生物学会第3回大会
ESR 応用計測研究会研究発表会

1989年度決算報告

収 支 決 算 書

(自1989年1月1日 至1989年12月31日)

収入の部

	決算額(円)	(予算額, 円)
1. 会費収入	6,694,415	(6,800,000)
1.1. 正会員	6,028,000	
1.2. 学生会員	216,000	
1.3. 賛助会員	195,000	
1.4. 海外会員	207,415	
1.5. 入会金	48,000	
2. 刊行物売上	4,911,464	(4,600,000)
2.1. 別刷	901,198	
2.2. Back No.	4,010,266	
3. 広告料	470,000	(300,000)
4. 助成金	1,340,000	(1,300,000)
5. 雑収入	63,364	(20,000)
6. 前年度名簿積立金	300,000	(300,000)
7. 前年度基本財産充当引当金	500,000	(500,000)
8. 国際会議預金利息	0	(0)
9. 前年度繰越金	12,462,414	(9,500,000)
収入合計	26,741,657	(23,320,000)

支出の部

	決算額(円)	(予算額, 円)
1. 事業費	11,093,809	(12,900,000)
1.1. 出版費	8,391,445	(9,800,000)
印 刷	(6,424,453)	
編 集	(1,200,000)	
発 送	(766,992)	
1.2. 行事費	421,440	(500,000)
1.3. 学会賞経費	6,921	(50,000)
1.4. 委員会活動費	124,000	(150,000)
1.5. 名簿積立金	0	(0)
1.6. 名簿作成費	675,400	(600,000)
1.7. 事務委託費	1,400,319	(1,600,000)
1.8. 会員業務郵税	74,284	(200,000)
2. 管理費	1,386,376	(1,461,600)
2.1. 庶務費	200,000	(200,000)
2.2. 会議費	137,939	(300,000)
2.3. 通信費	45,957	(30,000)
2.4. 旅費	700,000	(600,000)

2.5. 選挙費	49,010	(80,000)
2.6. 雑費	81,870	(80,000)
2.7. 会誌保管料	171,600	(171,600)
3. 予備費	0	(500,000)
4. 基本財産充当引当金	2,000,000	(500,000)
5. 次年度繰越金	12,261,472	(7,958,400)
支出合計	26,741,657	(23,320,000)

(注) 次年度繰越金には1989年度発行出版物の出版費
未払い分約400万円を含む。

貸借対照表 (1989年12月31日現在)

資産の部	
現 金	49,047円
預 金	13,477,049
学会事務センター	4,775,376
計	18,301,472
負債・正味財産の部	
負 債	6,040,000円
前受会費	4,040,000
名簿積立	0
基本財産充当引当金	2,000,000
正味財産	12,261,472
計	18,301,472

1990年度事業中間報告

1. 会員状況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1990年1月1日	891	12	5	908
入会	59	6	0	65
退会	31	0	0	31
1990年7月31日	919	18	5	942

2. 年会, 委員会等開催数

年会1回(10/3-5: 新潟), 総会1回(10/4: 新潟)
評議員会3回(2/17, 6/23, 10/2), 幹事会3回(2/10, 6/16, 9/8), 編集委員会4回, 春季シンポジウム1回(4/7: 東京, 地球惑星科学関連学会合同大会に参加), 国際地球物理金沢会議(WPGM)(8/21-25: 金沢, 国内8学会およびAGUと主催), 学会賞等受賞者選考委員会2回, 授賞規程, 授賞者選考細則見直し委員会1回, 会員問題検討委員会2回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 24 (1,2), 地球化学
Vol. 24 (1)

4. ニュース発行
Nos. 120, 121, 122
5. 学会賞等の授与(日本地球化学会賞1件, 奨励賞2件)
6. 学会共催, 協賛
 第27回理工学における同位元素研究発表会(共催)
 日本宇宙生物学会第4回大会(共催)
 国際腐植物質学会第5回国際会議(協賛)

1990年度会計中間報告 (1990年6月30日現在)

[収入の部]

科 目	収入額(円)	(予算額, 円)
1. 会費収入	6,555,300	(6,800,000)
1.1. 正会員	5,890,000	
1.2. 学生会員	228,000	
1.3. 賛助会員	330,000	
1.4. 海外会員	43,300	
1.5. 入会金	64,000	
2. 刊行物売上	2,191,925	(4,600,000)
2.1. 別刷	209,005	
2.2. Back No.	1,982,920	
3. 広告料	0	(200,000)
4. 助成金	0	(1,340,000)
5. 雑収入	17,498	(30,000)
6. 前年度名簿積立金	0	(0)
7. 前年度基本財産充当引当金	2,000,000	(500,000)
8. 国際会議預金利子	0	(150,000)
9. 前年度繰越金	12,261,472	(10,500,000)
(収入合計)	23,026,195	(24,120,000)

[支出の部]

科 目	支出額(円)	(予算額, 円)
1. 事業費	3,035,169	(12,600,000)
1.1. 出版費	2,582,169	(9,800,000)
編 集	(1,200,000)	(1,200,000)
印 刷	(913,507)	(7,800,000)
発 送	(468,662)	(800,000)
1.2. 行事費	417,368	(500,000)
1.3. 学会賞経費	0	(50,000)
1.4. 委員会活動費	21,000	(150,000)
1.5. 名簿積立金	0	(300,000)
1.6. 名簿作製費	0	(0)
1.7. 事務委託費	0	(1,600,000)
1.8. 会員業務郵税	14,632	(200,000)

2. 管理費	796,890	(1,281,600)
2.1. 庶務費	200,000	(200,000)
2.2. 会議費	84,600	(200,000)
2.3. 通信費	7,927	(30,000)
2.4. 旅費	497,000	(600,000)
2.5. 選挙費	0	(0)
2.6. 雑費	7,363	(80,000)
2.7. 会誌保管料	0	(171,600)
3. 予備費	0	(500,000)
4. 基本財産充当引当金	0	(500,000)
5. 次年度繰越金	0	(9,238,400)
(支出合計)	3,832,059	(24,120,000)

1991年度事業計画

1. 年会1回(愛媛大学)
2. 総会1回(愛媛大学)
3. 地球惑星科学関連学会1991年合同大会(共立女子大学)
4. 評議員会4回
5. 幹事会4回
6. 会誌発行
 Geochemical Journal Vol. 25(1-6),
 地球化学 Vol. 25 (1,2)
7. ニュース発行
 Nos. 124, 125, 126, 127
8. 会員名簿発行
9. 学会賞等受賞者の選考
10. 1992, 1993年度役員選挙
11. 学会共催
 第28回理工学における同位元素研究発表会
 1991年度質量分析連合討論会

1991年度予算

[収入の部]

科 目	1991年(円)	(1990年, 円)	増 減
1. 会費収入	7,100,000	(6,800,000)	300,000
2. 刊行物売上	4,600,000	(4,600,000)	0
3. 広告料	300,000	(200,000)	100,000
4. 助成金	1,400,000	(1,340,000)	60,000
5. 雑収入	50,000	(30,000)	20,000
6. 前年度名簿積立金	300,000	(0)	300,000
7. 前年度基本財産充当金	2,000,000	(500,000)	1,500,000
8. 国際会議預金利子	0	(150,000)	△150,000
9. 前年度繰越金	10,500,000	(10,500,000)	0
(収入合計)	26,250,000	(24,120,000)	2,130,000

[支出の部]			
科 目	1991年(円)	(1990年, 円)	増 減
1. 事業費	13,350,000	(12,600,000)	750,000
1.1 出版費	10,000,000	(9,800,000)	200,000
編 集	(1,200,000)	(1,200,000)	0
印 刷	(8,000,000)	(7,800,000)	(200,000)
発 送	(800,000)	(800,000)	0
1.2 行事費	400,000	(500,000)	△100,000
1.3 学会賞経費	50,000	(50,000)	0
1.4 委員会活動費	300,000	(150,000)	150,000
1.5 名簿積立金	0	(300,000)	△300,000
1.6 名簿作製費	800,000	(0)	800,000
1.7 事務委託費	1,600,000	(1,600,000)	0
1.8 会員業務郵税	200,000	(200,000)	0
2. 管理費	1,748,400	(1,281,600)	466,800
2.1 庶務費	200,000	(200,000)	0
2.2 会議費	300,000	(200,000)	100,000
2.3 通信費	30,000	(30,000)	0
2.4 旅費	800,000	(600,000)	200,000
2.5 選挙費	100,000	(0)	100,000
2.6 雑費	100,000	(80,000)	20,000
2.7 会誌保管料	218,400	(171,600)	46,800
3. 予備費	500,000	(500,000)	0
4. 基本財産充当引当金	2,000,000	(500,000)	1,500,000
5. 次年度繰越金	8,651,600	(9,238,400)	△586,800
(支出合計)	26,250,000	(24,120,000)	2,130,000

日本地球化学会授賞規程、受賞者選考細則の改正

1990年10月2日の評議員会において、日本地球化学会授賞規程、受賞者選考細則の改正が了承されました。改正点は、以下のとおりです。

改 正 前	改 正 後
日本地球化学会授賞規程	
第4 本会正会員	本会会員
原則として、	(削除)
授賞の期日	授賞年度の4月1日
満35歳以下	満35歳未満
第10条 1987年1月1日	1990年10月2日

日本地球化学会学会賞等受賞者選考細則		
2. その年度の第一回の評議員会	前年度の評議員会	
5. 3月末日	1月末日	
選考委員会	受賞者選考委員会	
推薦書	所定の用紙を用いた推薦書	
推薦理由書、説明資料	(削除)	

(条文の後に追加)	推薦は自薦、他薦を問わない。
8. (条文の前に追加)	授賞日は総会の日とし、
総会終了後に	総会時に

この改正による新しい条文を以下に示します。

日本地球化学会授賞規程

1987. 1. 1 制定
1990. 10. 2 一部改正

第1条 日本地球化学会（以下本会という）につき賞を設ける。

 柴田賞

 日本地球化学会賞

 日本地球化学会奨励賞

 日本地球化学会功労賞

第2条 柴田賞は、地球化学の発展に関し、学術上、目著な功績のあった者に授与する。

第3条 日本地球化学会賞は、地球化学の分野で、特に優秀な業績をおさめた本会会員に授与する。

第4条 日本地球化学会奨励賞は、地球化学の進歩に寄与するすぐれた研究をなし、なお将来の発展を期待しうる本会会員に授与する。受賞者の年齢は授賞年度の4月1日において、満35才未満であることを要する。

第5条 日本地球化学会功労賞は、我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者に授与する。

第6条 受賞者の選考は、別に定める「受賞者選考細則」により受賞者選考委員会（以下委員会という）において行う。

第7条 委員会委員は、評議員会の承認を経て本会会員の中から会長が委嘱する。ただし委員長は評議員であることを要する。

第8条 委員会は選考の結果を評議員会に報告し、評議員会において授賞を決定する。

第9条 本規程の変更は評議員会によって定める。

第10条 本規程は1990年10月2日より施行する。

日本地球化学会学会賞等受賞者選考細則

- この細則は日本地球化学会授賞規程第6条に基づき、柴田賞、日本地球化学会賞、日本地球化学会奨励賞、日本地球化学会功労賞（以下学会賞等という）の受賞者の選考手続きを定める。
- 受賞者選考委員会は、前年度の評議員会において決定された5名の委員をもって構成される。委員長は決定された委員のなかから会長が評議員会の承認を得て委嘱する。

- 委員の任期は、一年とする。ただし重任を妨げない。
- 委員は、学会賞等の受賞候補者の被推薦者、および推薦者であってはならない。
- 会員は、学会賞等の受賞候補者を1月末日までに受賞者選考委員会に推薦する。推薦に際しては、所定の用紙を用いた推薦書を提出する。推薦は自薦、他薦を問わない。
- 受賞者選考委員会は、受賞候補者の選定理由書を添えて、5月末日までに会長に選考結果を報告する。
- 会長は、受賞候補者を評議員会にはかり、その承認を得て受賞者を決定する。
- 授賞日は総会の日とし、受賞者の表彰は総会時に行なう。

新会員紹介（1990年6月～7月）

正会員（23名）

 濱崎 聡志 地質調査所鉱物資源部資源解析課

 福島美智子 石巻専修大学理工学部基礎理学科

 八野 祐二 地熱技術開発㈱技術部

 森永 速男 兵庫県立姫路工業大学理学部地学教室

 西川 雅高 国立環境研究所

 殿内 重政 新潟県衛生公害研究所

 尾形亜津美 岡山大学地球内部研究センター

 オズワルド M. 日本プラント協力㈱

 ゴータム P. 日本プラント協力㈱

 内藤 耕 金属鉱業事業団

 松田 博貴 石油公団石油開発技術センター

 向井 人史 国立環境研究所化学環境部

 藤本光一郎 東京大学理学部地質学教室

S西岡 澄濃 筑波大学大学院修士課程理工学研究科

S新村 太郎 筑波大学大学院博士課程地球科学研究科

S生田 直子 名古屋大学水圏科学研究所

S原田 尚美 名古屋大学水圏科学研究所

S姉崎 元 名古屋大学水圏科学研究所

S中塚 武 名古屋大学水圏科学研究所

S中村 弥生 岡山大学大学院理学研究科地学専攻

S北島富美雄 東京大学理学部化学教室分析化学講座

S永峰康一郎 名古屋大学理学部

S山口 学 弘前大学理学部地球科学科

(Sは学生)

賛助会員（2名）

大阪ガス㈱総合企画部（5回）

丸文㈱第3事業本部（1回）

計 報

 本会名誉会員三宅泰雄元会長は去る10月16日永眠されました。19日の葬儀に際し本会から花輪を献じ、綿菰邦彦会長からの弔辞が脇田宏副会長によって読み上げられました。

1990年水圏地球化学若手会の報告

 地球化学会年会終了後の10月5日17時から6日13時まで標記の会を開催し、27名の参加がありました。この会は若手研究者の横のつながりの強化と相互の啓発を計ることを目的としております。今回は「若手研究者の現状と将来その2」をテーマとして7名の発表がありました。

講演1 井関和夫（日本海区水産研究所）

 「北極海の物質循環－マッケンジー河口域における基礎生産量と粒子フラックス－」

講演2 橋本伸哉（東京水産大学）

 「東京湾に生息するムラサキイガイ中の汚染物質の分析」

講演3 杉谷健一朗（名古屋大学理学部）

 「美濃帯の珪質堆積岩中に保存されている二畳紀の熱水性堆積物」

講演4 松村 徹（東海大学海洋学部）

 「海洋における有機配位子について」

講演5 中口 禮（近畿大学理工学部）

 「海洋化学における生物制限元素の分布挙動の解明と生物試料の処理」

講演6 下島公紀（電力中央研究所）

 「沿岸域における金属－有機物錯体」

講演7 成田尚史（放射線医学総合研究所）

 「沿岸から外洋への物質輸送」

 質疑応答では活発な討論がなされ、参加者からは非常に有益で示唆に富んでいたとの声がありました。本会は来年も開催を予定（テーマ、開催時期、場所等については計画中）しており、広い分野から多くの方の参加を希望しております。興味をお待ちの方は世話人代表者（下島）までご連絡ください。また本年度の報告書をご希望の方も併せてご連絡ください。

1990年水圏地球化学若手会世話人代表者

 電力中央研究所 我孫子研究所

 水理部 水域環境研究室 下島 公紀

〒270-11 千葉県我孫子市我孫子1646

TEL. 0471-82-1181

FAX. 0471-83 2966

カルスト研究の動向について

地球化学学会年会において、一國・沢田両先生をコンピナーとして行われた課題講演「炭酸塩の地球化学」は、大気中二酸化炭素濃度の増加が注目を集めているおり、炭酸塩岩が二酸化炭素の大きなリザーバーの一つであることから、タイムリーでもあったし、炭酸塩研究者がこの問題にどのように関わりあえるかを考える良い機会になったと評価している。

さて、筆者は、石灰岩地域における水循環にともなう物質移動のメカニズムを化学平衡論的に理解し、水文学的アプローチとの融合を図ることを目指して研究を進めているが、残念ながら地球化学会は、石灰岩地域にあまり目が向けられているとは思われない。中国のように国土の 1/3 に炭酸塩岩が分布していないのを残念に思っている次第である。石灰岩地域の研究を現在精力的に行っているのは地理学の分野であるが、ここではカルスト研究の動向についてお知らせするとともに、同好の士を募りたいと思う。

1988年に国際地理学連合 (I.G.U.) は Study Group の1つに Environmental Changes in Karst Areas をとりあげ、人間の行為がカルスト地域にどのような変化をもたらしているのかを研究するとともに、世界中のカルスト地域研究についての情報交換を行うことを目的として活動を開始した。これに呼応して、日本地理学会に「カルスト地域研究グループ (代表者：漆原和子 (駒沢大))」が1989年に発足した。炭酸塩岩の溶食現象は地表および地下水系に及ぶため、地形、水文、洞窟、岩石・鉱物、土壌等の学際的協力を得たいということで広く協力を呼びかけている。現在、年2〜3回の研究発表会およびカルスト関係用語集の編集が進行している。

また、1988年中国桂林で開催された第21回 IAH (International Association of Hydrogeologists) 国際会議出席等2回の訪中以来交流を続けている中国岩溶 (カルストのこと) 研究所の袁 (Yuan) 教授が主掌する IGCP (International Geological Correlation Program of UNESCO and IUGS) project 299—Geology, Climate, Hydrology and Karst Formation が1990年よりスタートした。ニュースレター No.1 が私の所に届いているが、現在、24ヶ国127名がこのプロジェクトに参加している。活動の一環として、世界各国のカルストについて、地質、気象等の他、石灰岩の溶食速度の記載が必要であるので、協力をお願いしたい次第である。1991年には、中国とオーストラリアの巡検が予定されております。

(九州大学教養部化学教室 吉村和久)

IGC ニュース No. 4

IGC-92 事務局

アンケート回収数 2,899通 (8月15日現在)

—集計は9月30日時点で—

4月に配布されましたファーストサーキュラーには多数のご回答をお寄せ下さりありがとうございました。ファーストサーキュラーにはさみ込まれたアンケートの締切日は7月15日でしたが、その時点での回収数は1,860通でした。その後7月末日には2,561通となり、8月15日現在で2,899通に達しました。

下表は地域別応募数の順位です。7月後半になってから特にアジア、ソ連、東欧からの回答が増えています。(8月15日現在、カッコ内は7月16日の集計)

欧 州	592通 (352通)	アフリカ	95通 (40通)
アジア	573通 (329通)	オセアニア	92通 (63通)
日 本	535通 (429通)	南 米	49通 (16通)
北 米	534通 (423通)	中 米	20通 (8通)
ソ 連	409通 (200通)		

回収状況を記録が残っている前回開催の IGC-80 と比較すると、応募状況がよくにている事が分かります。バリでは、締切日時点で2,279通の応募が、その後の2ヶ月間にほぼ倍の4,607通となり、約1年後のセカンドサーキュラー発送時に合計5,940通になりました。実際の会議に参加した人はその82%に当たる4,883名でした。

IGC-92 京都の場合、締切日に応募者数はバリの約20%減ですが、その前後の回収傾向はバリの場合とよく似ています。最終的な参加者数については今後1カ月の回収状況で判断できると予測されます。

これらの状況から、第一次アンケートの集計は9月30日時点で行うことにし、これにもとずいて次の計画の手直しをしていくことになりました。

環境問題や資源問題に参加者多数?!

アンケートの途中経過を一見すると「第四紀環境問題」、「鉱物資源」、「大洋と大陸地殻の進化」、「西太平洋のテクトニクス」、「堆積盆解析」等のテーマに多数の応募があることが目立ちます。この傾向は巡検にも現われています。さらに今後の集計結果では変わる事も予想されますが、IGC-92に対する世界の期待が今後どのように現れるか注目されます。

この度事務局の略称を「IGC-92事務局」とすることにいたしました。正式には従来どおり「第29回万国地質学会事務局」です。

IGC-92 についての質問は下記事務局あてにお寄せ下さい。なお IGC-92事務局では毎月地質調査所から

発行される「地質ニュース」にも事務局ニュースを連載していますので併せてご覧下さい。

問合せ先：〒305 筑波学園郵便局私書箱65
第29回万国地質学会事務局
(略称 IGC-92事務局)
TEL. 0298-54-3627
FAX. 0298-54-3629

「地球惑星科学関連学会連絡会」の発足

「地球惑星科学関連学会連絡会」が別記4学会の参加のもと、1990年7月31日付けで発足しました。現在、他の関連学会へ「連絡会」への参加を呼びかけています。「連絡会」についての御意見、また学会・シンポジウムの日程等の情報を、行事幹事 (清水洋、東京大学理学部化学教室) まで御連絡下さい。「連絡会」の運営要綱は次の通りです。

地球惑星科学関連学会連絡会運営要綱

1990年7月31日

1. 本会を「地球惑星科学関連学会連絡会」と称する (以下「連絡会」という)。
2. 連絡会は下記の構成学会のそれぞれを代表する委員によって組織する。各学会の委員は1ないし若干名とする。
3. 連絡会の目的は、長期的視野に立って地球惑星科学関連学会間の情報交換を行ない、緊密な交流を促進するとともに、各学会固有の活動に便宜を計り、もって地球惑星科学の一層の発展を実務的に支援することである。
4. 構成学会の中から「幹事学会」を定め、幹事学会の委員が連絡会の世話人を務める。
5. 連絡会は適宜開催し、地球惑星科学関連学会の行事予定を中心に情報交換を行ない、必要に応じて、各学会の固有の活動を妨げない範囲で行事予定等の調整を図り、また、構成学会の2つ以上が参加する大会 (「合同大会」とよぶ) やシンポジウム等を企画する。ただし、合同大会やシンポジウム等の実行に関しては、別途、連絡会委員以外を含む「実行委員会」を組織することができる。
6. 委員の連絡会出席旅費等は各学会の裁量に任せる。それ以外の連絡会の活動経費については連絡会で検討する。
7. 連絡会の運営に必要なその他の事項は、連絡会で協議して定める。

記

(地球惑星科学関連学会連絡会構成学会)
地質学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、日本地球化学会、日本火山学会。

第3回原子力先端研究国際シンポジウム地球環境と原子力

主 催：日本原子力研究所、後援：日本原子力学会、日本保健物理学会

会 期：1991年3月13日 (水)、14日 (木)、15日 (金)

会 場：茨城県水戸市 (水戸プラザホテル)

○内 容

(1) 特別講演 (1件)

「地球環境・エネルギー・科学技術」

(2) 招待講演 (20件)

セッション1「原子力利用と環境」

セッション2「地球科学と放射性物質の移行挙動」

セッション3「放射性廃棄物処分の安全性」

(3) パネル討論「原子力と環境との調和」

(4) ポスター発表 (公募・約40件)

セッション1, 2, 3に関連するテーマ

○参加申し込み締切

一般参加申込 1990年12月10日 (月)

○一般参加 参加料は無料

会場の都合により参加者の数に制限がございますので、参加希望者は予め登録が必要です。

申し込み及び問い合わせ先

〒319-11 茨城県那珂郡東海村白方白根2-4

日本原子力研究所 東海研究所

環境安全研究部事務室内

第3回原子力先端国際シンポジウム

事務局

TEL. 0292-82-5827

第5回「大学と科学」公開シンポジウム

『地球環境変動の科学』

—かけがえのない地球を守るために—

主 催：第5回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会

日 時：平成3年1月29日 (火)〜30日 (水)

会 場：経団連ホール (東京都千代田区大手町1-9-4)

参加費：無料 (全席自由席)

☆第1日目 平成3年1月29日 (火) (9:30〜17:30)

B. 環境科学の新たな展開に向けて 田村 三郎

C. 人間—環境系の変化と制御—国内の諸問題を中心に

1. 生態系を触む酸性雨 戸塚 績

2. フロンと地球環境 富永 健

3. 水環境をめぐる現状と将来 須藤 隆一

4. 生活と廃棄物 沖野外輝夫

5. 高層居住と人間 大井 玄

6. 巨大都市圏の環境計画 川上 秀光
7. 環境と遺伝 武部 啓
D. 環境問題の変遷と環境研究 鈴木 基之
☆第2日目 平成3年1月30日(水) (9:30~17:30)
E. 中国における環境変動との関わり
1. 中国における酸性雨との発生源対策 定方 正毅
2. チベット雪氷圏と地球環境変動 樋口 敬二
3. 黄土高原緑化への試み 田村 三郎
4. 河西回廊地域における砂漠化の過程とその抑止 光田 寧
F. 西太平洋域における地球環境変動
1. 温室効果ガスの循環と地球温暖化の行方 田中 正之
2. 西太平洋域における大気・海洋相互作用 住 明正
3. 熱帯域大気のダイナミックス 加藤 進
4. 気候モデルの開発と気候予測 松野 太郎
G. 環境科学の新展開を目指して—総合討論— 田村 三郎・鈴木 基之

申し込み方法:

葉書に①参加日時、②連絡先住所(〒、電話番号)、
③氏名、④職業(勤務先)を明記の上、下記事務局
宛に送付願います。なお、座席の都合がありますの
で、お早めにご来場下さい(全席自由席)。

申し込み先: 〒102 千代田区富士見 2-4-12-302
クバプロ内『地球環境変動の科学』事務局
TEL. 03-238-1689
FAX. 03-238-1837

1991年度質量分析連合討論会

主催 日本質量分析学会
共催 日本地球化学会ほか

日時: 1991年5月15日(水)~17日(金)
会場: 中央大学駿河台記念館
東京都千代田区神田駿河台 3-11-5
TEL. 03-292-3111

講演申込締切: 1991年1月21日(月) 必着

発表形式:

- A. ポスター発表:
B. 通常講演: 講演時間15分(講演12分、討論3分)
C. シンポジウム: <課題> 生物活動と地球環
境-軽元素同位対比の変動から物質の流れを解
読する。講演時間25分(講演20分、討論5分)

申込方法: 1講演ごとにB5判用紙に

- 1) 上記A, B, Cの講演種類を朱記(プログラム編
成の都合により必ずしもご希望に添えないこと
があります)。

- 2) 講演題目、所属、発表者氏名(講演者に○印)
3) 申込者氏名
4) 連絡先(所属、所在地、電話番号、FAX番号)
5) 200字程度の概要

講演要旨原稿締切: 1991年3月30日(土)

申込者には2月中旬に要旨作成要領を送ります。

参加費: 主催、共催、協賛学協会員5000円(学生3500円)
非会員6000円、要旨代を含む)

懇親会: 5月16日(木)、会費5000円

申込先: 〒110 東京都台東区上野公園 7-20

国立科学博物館 理工学博物館

理工学研究部 島 正子

TEL. 03-822-0111

FAX. 03-824-3298

IUPAC INTERNATIONAL CONGRESS ON ANALYTICAL SCIENCES 1991 (ICAS '91) 講演の募集

主 催 日本学術会議、日本分析化学会
会 期 1991年8月25日(日)~31日(土)
会 場 幕張メッセ(日本コンベンションセンター)
国際会議場「千葉市市瀬」

参加登録 予約締切日 1991年5月31日(金)
参加登録料 予約締切前(一般 40,000円、学生 15,000円)
予約締切後(一般 60,000円、学生 25,000円)

講演申込 締切日 1991年3月31日(日) 要旨と共に
発表形式 口頭発表またはポスター発表
使用言語 英語

主要な討論題目

- ・ Separation Sciences
- ・ Chemical Speciation and Chemical Characterization
- ・ New Principles, Reactions and Techniques
- ・ Chemometrics and Robotics
- ・ Biochemical/Biomedical
- ・ Environmental
- ・ High-Tech Materials

申込方法 2nd Circularに案内があります。

申込先・問合先 ICAS '91事務局(日本分析化学会内)
〒141 東京都品川区西五反田 1-26-2
五反田サンハイツ内
電話・FAX 共用 03-5487-2790

または

日本分析化学会事務局

電話 03-3490-3351

FAX 03-3940-3572

Western Pacific Geophysics Meeting (WPGM)

電気通信大学 松尾 祺士

本会から選出されて、上記国際学会の組織委員になり、
学会にも出席したので概要を報告する。

この国際学会は American Geophysical Union (AGU) の呼びかけで、日本の諸学会が賛同して実現したのは初めての試みである。実際に話し合いが始まったのは、1987年8月の Vancouver における IUGG の General Assembly のときで、この時以来、日本側は京大工の木村磐根教授、東工大理の本蔵義守助教授が中心になり、米国側のマイアミ大学の C. Harrison 教授および AGU の Executive director である A.F. Spilhans, Jr. 博士との間で3年に及ぶ努力が会議を成功裡に終えることに結びついた。特に伝統と性格の異なる日本の諸学会; 地震学会、海洋学会、火山学会、気象学会、測地学会、地球化学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、地質学会、陸水グループへの参加要請、協力実現までの道は大変なものであったろう。一方、このことが、日本地球科学連合(仮称)への可能性を開いたことは、筆者個人としては喜ばしいことだと思う。

お膳立てがすんで、組織委員会が発足したが、これはむしろ名目的なもので、プログラム委員会と local organizing committee (LOC) の二つが会議の趣旨の実行と運営にあづかった。

会議は金沢で1990年8月21日(火)から8月25日(土)の5日間、4つの建物で行われた。参加者は1077名に達した。内訳は日本から852(内学生248名!)名、外国は米国の161名を筆頭に17ヶ国から225名であった。収入は登録料: 1,352万円、石川県、金沢市、万博協会、地震予知総合研究振興会からの補助金、寄附金が: 1,450万円、学会員負担金: 400万円(内本会は10万円)、および展示収入: 約54万円などで総計 2,859万円余であった。支出が約 2,500万円だったので、約350万円の余剰金が出た。これは主として参加者数が予想を大きく上廻ったのである。この余剰金は、将来の第2回 WPGM の日本での開催を含めて、地球科学関連学会の今後の協力活動の基金とすることが組織委員会できた。

会議は、Frontiers of Geophysics として、上田誠也 J. B. Minster および松野太郎の三教授の講演で始まり、後4つの建物に分かれて4日半で948(ポスターを含む、当日キャンセルは差しひいてない)講演が行われた。

会期中金沢 Föhn 現象もあって最高気温、37.4℃にも達した。しかし、会議のためには暑さは幸いしたといえる。何故かといえば、エアコンのきいた建物が取って逃げ出して、金沢見物に出かけた人などあまりいなかったからである。国際会議は厳寒が酷暑の中で行うべきか?

講演会場は20以上に及ぶ時もあり、到底全体の科学的収穫についてのべることは出来ないが、筆者が出席した会場での印象は、日本人の討論参加が活発化している印象を受けた。とはいえ、謙譲の美德のしみついた日本人は、欧米流の科学者社会とは、やはり距離があることも改めて痛感した。一方若い世代になるほど、語学の壁が薄くなったわけでもないことも感じられた。講演内容にしても、前に聞いたことのある話が繰り返して発表された場合が散見した。会合の数が多すぎ、サボると干されてしまうのではないかと心配しながら研究生生活を送るようになった研究者が増えて来ているのではなかろうか?

AGU の学会は参加者の登録料のみで運営されている。WPGM のような国際学会になると、招待者や旅費援助のことを考えねばならず、今回のように多額の補助金や寄附金が必要となる。特に日本で国際学会が開かれる場合、外国の参加者はお金持ち国日本が何とかしてくれるだろうと期待する。それやこれやで実行の中心にいる人々は一年以上ほとんど研究活動停止に近い状態になる。その店で木村・本蔵両氏をはじめ多くの方々の努力には頭の下がる思いである。また金沢市で、1000人以上参加する国際学会が苦もなく開催できるということも驚きの一つである。

本年4月に東工大で行われた合同学会あるいは8月の WPGM など、地球科学関係学会の loose coupling は促進される気配が濃くなって来た。本会もこのことは十分に考慮すべきことであるが、合同化が進むほど各学会の identity が問い直されることになる。筆者自身は、本会がもつと開かれた学会に成長するためにも、積極的に loose coupling に参加すべきであると考えている。

日本地球化学会ニュース

No. 124

1991. I. 28

1991年度日本地球化学会春季シンポジウム

主催 日本地球化学会

日時 1991年4月3日(水)~4日(木)

(3日: 口頭発表, 4日: ポスター発表の討論)

会場 共立女子大学八王子校舎

(東京都八王子市, 中央線高尾駅よりスクールバス10分)

地球惑星科学関連学会1991年合同大会の会期中に開催されます

プログラム

4月3日(水)

一般講演

(9:00~10:30) 座長 高橋和也

H21-01 Sino-Korean platform と日本の先カンブリ
ア紀変成岩類の Sr, Nd 同位体比

° 李 承求・清水 洋・増田彰正(東大理)

H21-02 西南日本に分布する後期白亜紀~古第三紀酸性
火成岩類の Sr, Nd 同位体比に関する研究

° 加々美寛雄(岡山地球研), 飯泉 滋・
沢田順弘・松本一郎(島根大理)

H21-03 山陰地方における白亜紀-第三紀火山岩類の主・
微量成分と Sr, Nd 同位体組成: 上部マントル
と下部地殻の改変

° 沢田順弘・三宅康幸・飯泉 滋・松本一郎
(島根大理), 加々美寛雄(岡山地球研),
武蔵野 実(京都教育大)

H21-04 イエメン台地における新生代火山岩類の K-
Ar 年代と全岩化学組成

° 折橋裕二・沢田順弘・Ashraf Al-Jailani
(島根大理), 長尾敬介(岡山地球研)

H21-05 地震に伴う温泉ガス組成の変動

° 永峰康一郎・杉崎隆一(名大理)

H21-06 熱水環境におけるポリチオン酸の分解反応

° 前川智範・綿萩邦彦・高野穆一郎(東大教
養)

(10:30~12:00) 座長 松久幸敬

H21-07 火山ガス中の炭化水素の起源

° 浅田憲子・清棲保弘(名大理)

H21-08 秋田駒ヶ岳から放出されるヘリウムの同位体比

° 坂本 稔・野津憲治・脇田 宏(東大理),
佐野有司(広島大理), 北 逸郎(秋田大鉱山)

H21-09 A solar component in the Earth:
Ne isotope anomalies in Loihi and
Kilauea basalts, Hawaii

° M. Honda, I. McDougall, D.B.
Patterson, A.D. Doulgeris (RSES,
ANU), D.A. Clague (USGS)

H21-10 チャート中の窒素同位体比と N₂/Ar 比: 大
気窒素同位体比の進化について

° 佐野有司(広島大理), C.T. Pillinger
(The Open Univ.)

H21-11 北海道 K/T 境界の硫黄同位体比激変: 海洋
無酸素症発生か?

° 梶原良道(筑波大地科), 海保邦夫(東北大
理)

H21-12 New indicators of shock metamor-
phism

° Y. Miura(山口大理)

編集者 高野穆一郎 〒153 東京都目黒区駒場3丁目8番1号 東京大学教養学部化学教室 電話 03(467)1171
発行者 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内 電話 東京 03(817)5801